

---

# 動物の王国

虹乃 咲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

動物の王国

### 【Zコード】

Z0806S

### 【作者名】

虹乃 咲

### 【あらすじ】

動物嫌いの夏希が動物がうつよういる世界にトリップしてしまった。動物好きな女の子ならともかく夏希は動物が好きじゃない。そんな女の子が動物の国で奮闘します。動物の世界にトリップしてしまった話はいっぱいありますが動物を溺愛する話ではありませんので注意を。完璧にギャグが入っています。

## 部活が好きなただの女子高生です（前書き）

この話は動物が嫌いな主人公という設定なので動物が大好きだぜ  
という方は不快に思つてしまふかも知れませんが  
すみません・・  
書きたかったんです！

## 部活が好きなただの女子高生です

真夏の太陽は日差しが強く、直視できない。ある者は熱中症で倒れ、またある者は部屋から出ないで涼んでいる。

そんな燐々と降り注ぐ日光の下、少女たちの軽快な足音と共に励まし合う掛け声が聞こえる。

「ファイトー！」

「ナイスパス」

その中で一番聞こえる声は部長の大隈おおくま 夏希なつきだ。

大隈という名字の割には身体は平均女性より小柄なため、よくからかわれている。

年中、部活で外にいるため肌は小麦色に染まっている。通常、女性は焼けるのを嫌うが本人は全く気にしていない。だが最近出来始めた鼻の上の雀斑は少し悩みのタネだ。

「夏希、ショート」

「とつやつ」

受け取ったパスを見事ゴールに打ち込む。

「ナース」

仲間と手を合わせ笑顔で応えた。部員もまるで自分がショートを決めたように喜んでくれる。

それが彼女の田嶋。

友達が急に声を上げたため、皆が一斉に見ると校門の脇に小さな

「あ、かわいー」

夏希はボールを一つ一つ丹念に磨いて片付けた。たわいない話をしながら片付け終わり、帰る支度をしていた時だった。

「聞き飽きたつつの、夏希」

「やっぱハンドボール部は最高だあ」

ハードな練習も終わり皆で雑談しながら片付けていた。  
今日の日差しのせいで元々焼けていた肌に新たな赤みが増す。だが片付けをしている彼女たちは気にしていない。

柴犬がいた。

何か地面を肉球でぱしづし叩いている。

「何あれ、かわゆすぎ」

「あ、うん。そだね」

騒ぎを出す部員を尻目に夏希は一步引いた。

どうやら犬は首輪もしていなく野良犬だらう。しかし毛並みは整つていて、薄汚れてもいい。

犬は騒ぎだしたこちらをじつと見て伺っていたが皆で校門に行くと人が大勢で来て驚いたのか、道路に飛び出した。

「あ、危ないよ」

「つのは、阿呆がー」

「な、夏希ー！」

夏希が部員一の俊足で地面をかける。

道路に出た犬を抱えた。犬は少しじたばたしたが夏希は無理に抑えた。

「つたく、だから」

溜め息をついて抱え直した。

「夏希、危なっ・・・！」

その声に道路の真ん中に突つ立つた夏希は振り返る。

田の前にトラックが迫っていた。

アドレナリンが大量に出て周りがスローに見える。  
何か友達が叫んでものが聞こえる。だけど何を言つてるか分から  
ない。

ただ目の端に顔に手をやる友達や恐怖の顔で自分を見てたのが他  
人事のように見えた。

部活が好きなただの女子高生です（後輩を）

- ・連載をこくつも書いてこむのこまた連載を増やしてしまひ黙日加減・

もう助けません

誰もが死を確信した瞬間、トラックが耳を劈くブレーキ音とクラクションを鳴らした。

「おい、気をつけろよ！」

「は、はい」

犬を抱きかかえながら呆然と夏希は返事をした。

トラックの運転手は毒づきながら去つていた。生温かい排気ガスが千夏の髪を揺らして行つた。

「夏希、大丈夫！？」

反対側から涙声がかかる。

見ると腰を抜かした友達が涙を流しながら心配している。

「あー、うん」

聞き慣れた声に安堵して夏希はやっと動きだした。

しかし犬が気の緩んだ夏希の腕からすると抜け地面に立った。

「つたぐ、もう迷惑かけるなよー」

夏希はしつしと追い払つが犬は何故か夏希をじつと下から見上げてくる。

「なんだよ」

夏希はもう用は済んだとばかりに首の元へ戻りつと犬を無視し立ち去りうとしたが犬は夏希のズボンを口で引っ張る。

「離せハつの」

「くうーん」

「くうーんじゃない。甘えた声を出すな」

小さな身体の癖に力が強い犬に引きずられて工事中で穴が開いているところに連れて行こうとしているようだ。

「ちょ、ちょっと待て。私はお前を助けたんだぞ。それなのにこの仕打ちは無いだろ？」

後ろから友達の笑い声が聞こえる。普段から動きや小柄な体格が犬に似ていると言われている夏希が本当の犬に懐かれているために笑っているのだ。

先ほどの心配なんてこれっぽっちも無い。

他人事だと思って、ぐぬぬと犬と根競べをする。部活で鍛えた筋肉で踏ん張るがするずる少しづつ真っ暗な穴に近づく。

「待つんだ、犬よ。さつきの態度は謝ろう、だから離してくれ。離してくれたら美味しいご飯をあげよう」

美味しいご飯で犬の耳がぴくりと動いたが動きは止まらない。

「夏希、危ないよ！」

本日二度目の友達の悲鳴を聞きながら犬と一緒に足が暗闇の中に入った。

なんとか踏ん張るがこの犬は見た目より重いのか、犬がつかまっている足に体重がかかる。

なんとかもう一方の足と両手でバランスをとろうとしたがバランス感覚が乏しい夏希は真っ暗な闇にとダイブする。

「の、のぉ————！」

せつかく一難去つたのにまた生命が脅かされた。

## もづ助けません（後書き）

一難去つてまた一難  
これが人生・・・ふつ

悪夢でじょり・・

だから動物は嫌いなんだ。

何を考えているか分からないし幼少期に何度も犬に追いかけ回されて酷く嫌な思いをした。家の近くには猫が住み着いて猫独特の匂いを発しているし、近くの木に巣を作っているカラスの鳴き声はうるさくて勉強にも集中できやしない。

しまいには今日の犬だ。無害な顔をして穴に突き落とすとはやつてくれる。しかしまあ前の命を助けてやったというのよ。

夏希ははづなされながら静かに覚醒した。

「う・・うん」

ほんやつと田をあけると動物の絵が描かれた壁が広がる。子供向けの絵のよつて可愛らしく描かれていて子供が喜びそつだ。

「・・は?」

一気に目が覚めた。ちょっと待て、自分の部屋はこんなファンシーナ部屋じゃない。

身体を起こすと夏希が5人寝転んでも余る大きなベッドに寝ていた。ふかふかの枕は何故かライオンのカバーだ。他にもシマウマやイルカの枕もある。

「なんじゃ、この地獄はーーっ！」

動物が好きだったりふわふわ乙女には嬉しい部屋かもしれない。だが夏希は。ピンクが大好きな乙女でもないし動物など触りたくもない。だから部屋には動物の小物など全く無いし動物も飼ったこともない。

「どうしたー」

夏希の悲鳴に誰か駆け込んできた。

血相をかかえて来た男性は男の癖に千夏とは対照的に肌が白く見事な銀髪は腰に届くまである。瞳も長く染み一つない顔は周りを魅了する。

うん、以前までは髪の長い男なんて不潔だと思っていたが、この人物を見ると髪が長いというのも考え方かもしれない。

夏希は一目見て羨ましいと思った。

「うわ、す深い美形」

「何を言ひ。お前みたいにモモンガみたいな円らな瞳の方がいじらしこや」

「・・・は?」

たつぱり三拍あいた。

この男は馬鹿にしてるのだろうか。誰がモモンガだと、それは褒め言葉じゃない。むしろ貶しているだろうが。

「あなた、馬鹿にしてるでしょ」

「いや、お前のリストザルのよう」少しこ身體は可愛こと思つただが  
「馬鹿にしてるー。」

「」の誰がサルに例えられて嬉しいのか。周りから夏希は小型犬  
のようだね、と言われただけでも鳥肌がたつとてうのに動物に例え  
るのは止めて欲しい。

「つか、あなた誰よ」

「ああ、私はこの動物王国第184代国王だ」

「・・は？」

夏希は向回田かになるか分からなこと言葉を発した。

悪夢でしょ？・・（後書き）

モモンガはなかなか可愛いと感づけど・・

## 格好いいは罪なのか

今度はたっぷり5拍もあいた。

「・・・は？」

「だか「り」の動物王国の現国王だと」

聞き取れなかつたのか、と今度は一文字一文字ゆっくり発音してくれる。

耳の悪いお婆ちゃんに優しいね、うふと言つたといつたが、いや、聞こえましたとも。その国王つてこいつのは、ね。だがしかし！動物王国とは何ぞや。

夏希はしづめへ考へていたがある結論を導きだす。

ああ、もしかして動物を飼つてこらえて「り」とか。それできつと支配的な気分になつてしまつて残念な考へに至つてしまつたのだろう。

ひ。

夏希は可哀そうな物を見るような目で見つめた。  
わかつてゐる、わかつてゐるよ、あなたの気持ちは痛いほど分かるよ。  
慈愛の目で見つめてあげた。

「なんだ、その目は」

「大丈夫よ、私と一緒に精神科に行こうね。大丈夫、先生は優しく  
あなたを受け止めてくれるよ」

「なんだ、その精神科とは」

「あなたみたいに、ちょっと危ない人を正常に立ち直らせてくれる  
ところ」

「私は正常だ」

始めは皆、そう言つんだよねと頭をうんうんと振る夏希に男が怖  
い形相で肩を掴んだ。

「私は大丈夫だ」

「は、はい」

あまりの形相につい頷いてしまつたが夏希の頭の中にはまだこの人が危ない人物であると初つ端からインプットされている。

掴まれていてる肩を見ながら、どうやつて離れようかと試行錯誤していると田の前の男は端正な顔を崩して、でれでれとした顔になる。頬を薄いピンク色に染め上げ、上気している。何だか息も荒くなつてきていて身の危険を感じる。

き、きしょ・・

さつきまで格好良かつた顔を返してくれ。  
自分の顔ではないが、ついそう思つてしまつた。

「お前は本当、潰れたヒキガエルみたいに可愛いな」

「ふやけんなん――――――――――――――――

「・・・ふ、ふ」

・・・・・・は?

突然笑い出した夏希に掴んでいた手を外して顔を覗きこむ。  
もしかして悪い物でも拾つて食べてしまつたんだろうか、心配しておろおろし始めた。

だが次の瞬間、腹から出された声と一緒に強烈なビンタが飛んできた。

無防備に夏希の顔を覗きこんでいた国王は夏希の渾身の一撃を為す術もなく頬で受け止めた。

## 格好いいは罪なのか（後書き）

ヒキガエルは乙女には禁句でしょう  
いや、ヒキガエル愛好家が女性の中にはきっといるはずだからOK  
ですね

## カエルのことはおたまじゅくしです

ヒキガエルは無いだろう、しかも潰れたときた、花も恥じらいで女に対して。

せめてモリアオガエルにしてくれ、あの国指定の天然記念物に。

だけどカエルの肉は人間の肉に似ているというし、いいのか。いやいや自分、妥協はいかんだろう。カエルと言つても所詮はカエル。カエルの子はカエルだ。  
何だか自分がおかしくなつてきている、それもこれも全てこの男のせいだ。

夏希は倒れて意識を失っている男を肩で息をしながら見つめた。

なんなんだ、この男は。

人をモモンガと言つたりカエル、いやヒキガエルと言つたりして。ヒキガエルという言葉に根を持った夏希はもう一生カエルなんて見たくないと思った。カエルが悪いわけではない、この男が悪いのだ。しかしもうカエルは見たくない。

しばらく足で男を蹴飛ばしていると廊下からまるで横綱が走つて来るような音がして扉が勢いよくあいた。効果音をつけるなら「バン！」だ。

「兄様、今の雄たけびは何なの」

これまた整つた顔立ちの男の御成りだ。しかも兄弟そろつて失礼な奴らだ。

乙女の声を雄たけびだとは甚だしい。

自称国王とやらの意識が戻つたので外でお茶を飲みながら話を聞くこととなつた。雲一つない空は青く澄んでいて夏希の心とは違つて晴れ晴れとしている。

「で、動物王国だつて？」

夏希がローズティをちびちびと飲みながら冷たい目で銀髪の男を見る。男はもじもじとした様子で夏希を窺つている。

きもい、顔でそれを表すと大の大人なのにしゅんとしている。

「ああ、国王のフランシスだ。」うちの弟がアベルだ」

「あの時はジリモ」

「あの時？」

はて、こんな茶髪のいかにも外国人風の男と出会つただろつか。こんなに田立つ顔なら会つたら絶対に覚えていふと思うのだけれど。夏希はアベルの顔を凝視する。茶髪で緑黄の瞳の顔は一見すると可愛らしい犬のように見えるが、如何せん、そんなことを言つたら

犬に失礼、いやアベルに失礼だろう。

「あれ、分かんない？ほら、車が来た時に助けてくれたでしょ」

「全く、身に覚えがないんですけど」

「えつ、健忘症？」

確かに夏希は授業の内容を忘れてしまうことはあるが、そこまではひどくないはずだ。ちゃんとノートを見れば思いだし、そんな歳ではない。

まだ高校生なんですけど、心の中で毒を吐ぐが顔には出さない、それが大人のマナーだ。

「失礼だろ、アベル」

「いや、あんたの方が失礼でしょ」

会話に参入してきたフランシスをじと目で見る。

動物に例えられるくらいなら、まだ人間要素のある「健忘症」の方が嬉しい。

「私のどじがだ？」

「発言全て」

「なつ・・・！」

口を開けてぱくぱくさせている阿呆を放つておいてアベルに向き直る。

「どいで会つた？」

「今日、学校の前で」

「今日?・・私、犬しか助けてないけど」

こんがりと焼けた大きなクッキーを頬張りながらアベルに問う。

隣で「おお、まるで口いっぱいに物を詰め込んで歩く」ともできぬいシマリスのようだ」とうつとりしている奴はこの際、視界に入れないで空氣として扱うことに決めた。てか、表現がいちいち細かすぎる。なんだ、歩くことができないって。

確かに色はアベルに似ているかもしれない、だけど助けたのは人

間じやなくて犬だ。

「あ、そうそう、それが俺

「・・は？」

食べていたクッキーが夏希の手を滑り地面に落ちた。

## カルのナはおたまじやくしやす（後書き）

カル愛好家の方々、すみません  
こんな言葉を見て不快に思つゝことじょう

あの田らな瞳、ぴょんと跳ねる姿がいじらしこと思つていらしゃ  
ることじょう  
だがまだ未熟な虹乃には分かりません  
まだまだ精進がたりないよつです・・・

犬は犬でも・・

まだ半分以上も残っていたクッキーが柔らかな芝生の上にぽとりと落ちる。

「あ、勿体ないよ」

「・・・ごめん、もう一回言つてくれる?」

「え、だから勿体ないって」

「その前じゃー!」

「うーんと君に助けてもらつた犬が俺つてこと?」

そう、私が聞きたかったのはその部分だ。  
だが聞いたところで理解は出来ないかもしれない、というかこの男も自称国王の弟だけあって可哀そうな人なのかもしれない。それ

ともふざけているのだろうか。

第一、この兄弟は全くと言つていいほど似ていない。髪の色からしてもそうだし、顔も別物だし醸し出している雰囲気違う。アベルの方はふんわかと言つていいがこちらの銀髪、フランシスは冷たい感じだ。そんな2人が兄弟なのだろうか。

だが、今は置いておこう。それはたいして問題じゃない。

「その犬があなたってこと?」

馬鹿にしながら眉を上げる。魔法じゃないんだし、どこの世界に人間が犬になるとやうのだ。魔女に野獸にされた話の方がまだ信じられる。

いや、もしかしてこの人、爽やかな顔をして実は犬志願？まさか女王様という仮面で顔を覆つて際どい服を着た飼い主に鞭で叩かれることに悦びを見出している犬という名の奴隸！？

はっと口を押さえて椅子から立つた。

そして急に立ち上がった夏希に驚いているフランシスを穴があくほど見る。

「もしかして、あなたが女王様！？」

夏希は確信したように2人を交互に見る。

自分はもしかしてアブノーマルな世界に連れ込まれようとしているのだろうか。いや、まだノーマルでいい。鞭なんて使いこなせないし、痛みを求めるようなことはしたくない。

「何を言つているんだ」

座るように夏希の手を取りうつとするフランシスの手をかわし、回れ右をしてクラウチングスタートの構えをとる。

「お、おー」

フランシスの掛け声を合図にスタートダッシュを切った。

後に残されたのは出した手を引っ込めるのを忘れてそのまま固まっているフランシスと腹を抱えながらクッキーを喉に詰まらせるアベルだけだった。

犬は犬でも・・（後書き）

鞭で叩かれ蠅燭の火で悦ぶなんて・・  
虹乃にはできない・・！

走つても走つても見えるのは白い大理石の壁、あのど変態兄弟から逃げたはいいものの夏希は完全に迷ってしまった。

「ヨーヨーハーってか日本にこんな城が建つてるとこなんてあつたつけ」

ようやく走るのをやめて辺りを見回してみる。

高い天井にどこもかしこも輝いている廊下、猫の銅像や青銅の犬の耳をつけた鐘、色とりどりの鳥の絵画がそこらじゅう至るところにある。

金持ちの家に見られる物ばかりだが、ちょっと待て、あきらかに動物が混じっている。

「なんでパンダの花瓶・・・」

パンダの頭から見事な花が咲いている、それを見て夏希は脱力した。

「おかしいだろ、何なんだ！」は

うへえーと舌を出しながら手当たり次第に部屋を開けてみる。出口が分からぬのだから近くの部屋の窓から外に出て帰ればいい。そして変な人がいると警察に訴えればいいだろ？

すぐ近くの部屋から幼い声が聞こえた。  
もしかしてあの変態に捕えられた子供かもしれない、夏希は正義感から扉を開けた。

「ハハハやああああああああああああ…！」

だが中にいたのは一面の白、そこには赤ちゃん兎が部屋一面にいたのだ。

もともととしていて可愛らしきな、なんて思つともなく、夏希は盛大な悲鳴を上げる。

その声に驚いた兎たちは一斉に後ろへと飛び跳ねた。  
その動きにまた夏希はびくつとする。

だ、だめだ。跳ねる動物だけは駄目だ。

動物自体あまり好きではない夏希だが、跳ねる動物は一番嫌いだ。

「う、そのまま動いちゃ駄目だぞ。いいか君たち、動いたら私が死んでしまうからな」

手のひらを向けて鬼たちの動きを制して逃げようと扉を引こうとしたが外から聞こえた声に思わず扉を閉めて自分の逃げ道をふさいでしまった。

「どうしたー？何があった？」

「うるさい、変態。黙れ」

「ぐ、変態だと。私はフランスと云う名がある」

扉をしっかりと両手で塞いで鍵を閉めた。

ドンドンと叩く音が聞こえたが聞こえないふりをして、もぞもぞ達と対峙する。

赤い瞳がこちらを怪訝に窺っている、きよとんとした仕草が人間のようで愛らしい。だが今はそんなことを考えている場合ではない。

夏希は兎たちの後ろにある窓を見た。

大きな窓は外に続いているようで、ここから見える青い空が眩し

い。

「へんづ、シャバに出たい」

だがその外と云う名の自由を手にいれるにはこの看守共の壁を越さなければならぬ。自由を手にするにはいつも障害<sup>がつきものだ。</sup>

「いいか、絶対に動いちや駄目だぞ。絶対に、そこを一步たりとも動いてはならない」

動物相手に本気になりながら摺り足で窓際に寄る。短い距離なのにまるで長距離走のようにひどく疲れる。いや、長距離以上だ。

ああ、自由が、私の自由が見えてきた。

窓の鍵に手をかけ、いざ羽ばたかんとしてついている時に田の端で白い物が動く。

ま、まさか、ギギギと顔を動かすと、ちよこと小さなベイビー兎が夏希の足元に座つてゐる。興味津津の瞳が夏希に真っ直ぐに向いている。

純粹な瞳だ、全く曇つていない。

だがそれは他の機会の時に向けてくれ。

「ストップ、そこで止まれ止まるんだ、ジョージ」

ジョージとは誰なんだ、自分でも分からぬが口が勝手に動くのだ。仕方がない。

しかし夏希が勝手にジョージと呼んだ小さな兎は嬉しそうに跳ねて喜びを全身で表そうとする。しかもだんだんと夏希に寄つて来る。

「ひつ、ぬおおおう。駄目だ、近寄つてはいけない。いいか、私は動物に触れたら死んでしまう病なんだ。君なら分かつてくれるだろう」

はてそんな病氣があつただろうか、もはや夏希の頭に「正常」といつ言葉はない。あるのは「逃走」といつ文字のみ。

だがそんな夏希の気持ちも虚しく、兎は夏希の足にすりすりと柔らかい身体をくっつけた。

その瞬間、夏希の視界がブラックアウトした。



わわわわ (後書き)

兎は可愛いでしょう・・・  
ですが虹乃も跳ねる動物には少し、トラウマがあります・・・  
それはおいおいね

## 悪質なセールスマン

また魘されながら覚醒すると、先ほどと同じベッドの上だった。  
何故かカエルの枕が増えている。

やめてくれ、切実に。

君に届かない想いを胸の内にします。  
溜息をつきながら、ゆっくりと身を起こした。  
今度は驚かないぞ、ファンシーな部屋に飽き飽きしながらも扉に  
手をかける。

開けて・・閉めた。

・・やつぱり現実らしい。

もう一度、扉に手をかけて今度は慎重に開く。

閉めた扉に手をかけながら冷静になる。  
い、今、何か変な物が見えた気がするが、いや氣のせいだらう。  
氣のせいであつてほしい。

田の前には大きな熊が警備服を着ながら扉の脇に立っている。夏希よりも一倍は大きい熊に身の危険を感じる。

これは確実に一呑みでいけるな、きっと熊の頭の中はそれで一杯なんだ。

自分の死期を悟った夏希のくりつとした瞳から大粒の涙が出る。ついでに鼻から口にかけて透明の架け橋も出現した。手で拭くも後から後から溢れてくる涙は止められない。

せっかく犬を助けて、いい行いをしたのに突き落とされて目が覚めれば変態に囮まれて、逃げよつとしたら兎にもさもさられて散々だ。

「ふいー、ひつゝ、じゅる」

鼻をする音はこの女にあるまじき行為だがこの際言つてられない。どうせ熊に食べられるのだ、せめて熊が食べる気をなくす顔で食われてやる。

そして田の前に影が差した。

「よいよか、と諦めてぎゅっと田を瞑るが何も起こらない。」

恐る恐る田を開けると熊が夏希にハンカチを差し出していた。しかもピンク色できつちりと折りたたまれている。

「へっ？」

真っ赤になつた目で見つめると熊がそのハンカチで夏希の顔を拭いてくれる。大きな手で頑張つて小さな夏希の顔を「じじ」と優しくしている。

「ちょ、ぶつ」

為されるがままだが、動物にあるまじき行為に言葉を発しようとすると顔を拭かれているため出来ない。

よつやく拭き終わつた熊が離れてまた扉の脇に立つた。しつかりと直立して身動き一つしない。つむ、できた熊だ。

「あ、あのー」

夏希が声をかけると顔だけこりこりに向けて夏希の言葉を待つている。

真顔で見られるとやはつ怖い。

「拭いてもらひつてありがといひ『れこました』

恐々お礼を言つと氣にするなど言つて頷いた。そしてまた顔を戻して直立する。

以外にいい奴かもしない、熊という動物は。

夏希が初めて動物に好感を抱いた時だつた、その熊さんが深々とお辞儀をした。

何が来たの、扉から顔をひょっこり覗かせるとあの銀髪男が雄大に歩いてきた。そんな彼と扉越しに目が合ひつ。

条件反射で扉を閉めようとするが、閉まらなかつた。

視線を下に向けると足が見える、横に立っている熊さんの茶色い足が。

お前は悪質なセールスマンか、さきせじの恩を忘れて夏希は熊を睨むが当の本人は素知らぬ顔だ。  
これが自宅だったら不法侵入で訴えられるが、ここは夏希の家じやない。

夏希は泣く泣く国王の訪問を受けた。

## 女王様ではなく国王様

入ってきたフランシスとヨルミビ距離をとつながら落ち着いて話をすることにした。

「なぜ、そんなに離れる」

「いえ、離れてません」

フランシスが夏希に近寄るとその分だけ夏希が離れる。その繰り返しを続けるとフランシスはもつ諦めて長椅子に腰を下ろして顔を向けるだけにした。

「では少し聞いてくれるか

「鞭とかそういうのは勘弁です」

「・・・は？」

埒が明かないといった様子でフランシスが溜息をついた。夏希に聞こえる深い溜息に夏希はむっとする。

なんで残念そうにされないといけないのだ。

たいそう遺憾に思つうが黙つて話を聞くことに集中する。もしかして変態と思っていた人物は工事中の穴に落ちた夏希を助けてくれた思いやりのある人物・・かもしけないのだ。

まあ、そんな考えは無かつたが。

「まず始めに不肖の弟、アベルを救つてくれて礼を言ひ

「いや、だから助けて・・・」

ない、と云ふとあるのにフランシスの銀色の瞳が黙つていろと訴える。

なんだよう、少しくらい話したつていじじゃないか。不満を顔に出すがフランシスは続ける。

「そして謝罪を。お前が寝ている間にアベルから全てを聞いた。あやつはお前に助けてもらつたため、こちらの世界で礼を尽くそうと思つて承諾なしつれできてしまつたと」

「ちよつと待つて。」こちらの世界つて?」

もう訳が分かりません、先生。この足りないおつむに新たな知識が入るスペースを下さい。そうしないと頭が爆発しそうです。

「ここの世界はお前が住んでいる世界とは違う。ここは動物が統治する世界だ」

「え？ と、確かに動物はいたと思つんですが動物が統治してゐるって？」

「説明するよりみてもうひつた方がいいな」

そう言つとフランシスは徐に服を脱ぎ始めた。  
おもむね

「ちょ、やつぱり女王様なの！？ その服の下に黒い衣装が？ いえいえ、私はまだ正常なんです、正常でいさせてください」

手で顔を覆つて新しい新境地など見たくないと首を振る。

だが何も起こらない、鞭のしなる音も聞こえない、何の物音もないためこつそり指の隙間から覗いてみた。

そこには銀色の牡鹿がいた。

大きな角は天に向いていて、身体の斑模様はあちこちにあるので

はなくて、まるで意志があるよつに整つて真つ直ぐだ。銀色の瞳は賢さを讀えているし、耳は何一つ漏らさないとこつよつにぴくつと動いている。

「きれい・・・」

その言葉によつくりと牡鹿が尊大に夏希に近づいてくる。自分の美しさが分かつてゐるよつに、もつたいくぶるよつに、だ。  
瞳が訴えている。どうだ、例えようもない美しさだねつ、と。

夏希は驚きのあまり固まつていったが鹿がこいつに近づいてきたのを見てこいつにじりじりして叫んだ。

「来ないでっーーー！」

その言葉に銀色の鹿が歩みを止めた。

今、何と言ったと混乱しているように田<sup>た</sup>が泳ぐ。そんなことは言  
われたことが無いのか戸惑つてゐるようだ。

だがそんな鹿の様子を気にもとめないで夏希は尚も続ける。

「絶対によらないで。いい、そつから動いたら本<sup>マジ</sup>氣で許せないから」

やつ言つて壁に虫のように張り付く。そして壁に沿つて歩きながら扉へと向かう。視線は鹿に釘付けだが、それは鹿の一<sup>イ</sup>拳一<sup>イ</sup>動を見守つてゐるだけであつて見惚れてゐるわけではない。

扉に近づくと、ゆうぐりと鹿を驚かせないよう静かに扉を開ける。

最後まで睨み合ひながら背中から出て行く、だが何か温かい物がお尻にぶつかつた。右手で扉を閉めながら左手でそれを触つてみるとなんか硬い、けれど肌触りはいい。

何だらか、と振りかえつてしまつた。

そこには、あの扉の脇にいた熊さんが後ろにたつていた。それはもう、何の表情もなく。

夏希は扉を閉めて中にひもひて震える手で鍵をかけた。

なななな、何で熊さんが、いや先程もいたんだから当たり前だろ  
うけど何で後ろにいたの？てか、触つてしまつた、すぐ毛並みが  
良かつた・・・。

## だってステレオタイプがあるんです

一人で動物に触ったことにあわあわしていると先程の落胆ぶりなど無かったように牡鹿が夏希を見ていた。

「・・・駄目よ、駄目。本当に、半径5mは近寄ってはいけないというルールが私の中にはあるの、お分かり?」

涙ながらに訴える。

左手をふるふるとせながら、その手をどうしていいか分からなく持て余している。

だが鹿は首を緩く振ると淡く光り出した。暖かな黄色い光が全身を包み込んで、人間の形を形成していく。

「ひ、やあああああ！」

銀色の牡鹿が人間になつた瞬間、夏希は顔を真っ赤にして叫んだ。

「ふ、服を着てえ！」

細い割に筋肉質な身体がぱつちりと田に入つてしまつた。  
急いで顔を背けるが、これは夢に出てきそうで嫌だ。

「すまない、つい忘れてしまつ」

「もつ着た？」

「ああ」

「本当?」

「ああ」

服を着たフラン시스に何度も念を押して聞いた。ようやく夏希は背けていた顔を戻した。

「で、分かったか?」

「あなたが変態ってこと?」

「違う!私達の姿は動物のものだと」

ちよつとした[冗談だつたのに力一杯否定された。そんな残念そうな子を見る目で見ないでよ。

「ま、まあね」

田の前で人間が動物になるのを見てしまつては否定できない。  
まだまだ世界は広かつたようだ。

「めんね、精神を疑つて。あなたの性癖を疑つて。

「じゃあ私が助けた犬はアベルつてこと?」

「だからわしが言つているだらけ」

呆れた顔で言われて腹が立つ。

仕方ないでしょう!私の世界の常識に動物は人にならないつてい  
う固定観念があるんだから。

生まれてこのかた、信じられないことを言われても理解できない  
し、しようとしないのが人間の性さがつてやつだ。

夏希はおいおいと肩を竦めて壁に寄りかかり、格好いいポーズが  
決まつたと思つたがあることにふと気付く。

「待つて、じゃあ私の身体は?せつかく助けた私はどうなつてんの  
!?」

「だから今からそれを説明するから落ち着け」

今にも掘みかかるうとする夏希の肩を押さえて自身の額に手をやる。わざとらしい仕草が似合つていてむかつく。

「全く、何でアベルはこんな娘を連れてきたんだか」

「ちょ、失禮でしょ」

また殴ろうとするが頭を押さえられ、前に進めない。

「ぬう」

「少しほ落ち着け」

「止まり深く海より高く落ち着いてます」

「逆だらう」

冷静に返すフランシスに苛立つ。くそ、私は子供じゃないんだぞ。

自分よ、落ち着け、落ち着くんだ。こんなところで騒いでちゃあ、子供と思われる。私は大人なんだ、大人はどんな時でも冷静に対処しなくてはならない。

だがそれはフランシスの言葉により、ぼろぼろに砕ける。

「大丈夫だろ？お前の身体は今頃、病院に運ばれているはずだ」

「・・・は！？」

「外傷もなく、ただ寝ているだけだ。意識だけじゃらに飛ばしたみたいだからな」

全く困った弟だ、苦悩が刻まれる顔は疲れているというのに美しさは壊れていらない。だがそんな顔に見惚れることなく夏希は俯いて握りしめた拳を震わせる。

「ふ、ふざけんなあ！私を家に返せ！－！」

せつかくトラックを避けて病院送り、もしくは死を避けたとい  
のに何で工事中の穴に落ちて病院送りにされなければならない。

犬を助けたことにより轢かれたという武勇伝ならまだしも助けた  
犬に穴に落とされたなんて格好悪すぎる。末代までの恥だ、いや私  
が病院にいる間に助けた犬に恩を仇で返された女として間抜けな話  
が学校に広まってしまう。

そんなのは女の意地を持つて止めなければならぬ。

「お礼なんていらないから返して」

「しかしなあ」

「私に不名誉を与えると言つのか」

「連れてきたアベルしか返せない。そのアベルが珍しくやる氣を出  
しているんだ。後数ヶ月は諦めるんだな」

「数ヶ月!/?この動物地獄に一日だって耐えられないと言つの?」

もう私の命はここで果てるのかもしね、いや駄目だ。私には  
ハンドボールがあるんだ。  
皆でトップを目指すと約束したんだ。

こうなればその張本人に直談判をしようと部屋を飛び出した。



長閑な風が吹き、雲がちょうど太陽を隠した中、2人の第一次言い争い大戦が勃発していた。両者とも大声で負けてはおりませんが、おっと何か動きがあつたもようです。

「帰らせて」

「嫌だ」

「帰らせる」

「い、や」

何度も繰り返すが相手は折れてくれません。彼の心はあるで目の前に聳え立つ富士山です。私はまだ富士山の土も踏めていないようです。

「お礼なんていりません」

「俺が嫌なんだよ」

「助けた人がいいって言つてるんですぜ、旦那。もうそろそろ折れましょうぜ」

「夏希が折れてよ

「人の名前を軽々しく呼ぶな」

どうして知ってるんだと思つたがこの犬を助けた時に何人もの友達に呼ばれていたな、と思い出した。流石によく聞こえる耳ですけど。

「人間、特に女の子って皆、動物が好きでしょ。それなのに夏希はさ、動物が嫌いなんて聞いてないよ」

「はっはっは、言つてないからな」

夏希は腰に手を当てて乾いた笑いを出しながらアベルを見据える。

確かに過半数以上の人間は動物に癒やされ、愛で一緒に生活していることだろう。しかし何事にも例外はある。

「夏希、本当に女の子？」

真っ平らに近い夏希の胸を無遠慮に触る。

「あれ、ちゃんとあつた

「死ねつ！－！」

なんて失礼な奴なんだ。人を勝手に連れて來たと思つたら女じやないと？どれだけ人を馬鹿にすれば氣がすむんだ。飼い犬に手を噛まれた氣分とはこのことだ。

「明日の太陽が拝めないよ！」としてやる。

ぼきぼきと指の関節を鳴らして臨戦態勢を整える。  
こいつでも来い、乙女の名譽をかけて戦つてやる。乙女の名譽はこんな野郎に負けるほど小さいものではないのだ。

「落ち着いて。俺は夏希を喜ばせたいんだから」

「帰してくれたら超喜ぶ、崇めたてる、毎日お礼言つかう」

「俺がなんかしたいの」

「こらんわ」

話が平行線を辿る。この宇宙人とはちゃんとした会話ができない。

「・・・むへ、いい。何でもいいから礼をして早く帰してよ」

「りょーかい」

結局、夏希の方が折れた。夏希は説得を諦めて早く帰らせるよう  
に頼むこととした。

願わくは、彼が直ぐに飽きてくれますよ!」。

「この想いには君に届くのだろうか。



## 子供じゃないもん

ひがらの世界に来て2日目の朝、動物が描かれている壁と挨拶をして起れる。

そしてまた溜め息が出る。

なんでかまた枕が増えている。ベッドで寝る人物は1人なのになぜ枕が5つもある。シマウマにイルカにライオンにカエルに不細工な犬だ、もうやめてくれ・・・。

朝から憂鬱な気分で身体を起こし、着慣れた部活服であるジャージに着替える。

フランシスが用意してくれた服はクローゼットにある、だがしかし、どれも乙女ちっくなんだ。ピンク色や白のどこのゴスロリって感じの服だ。

しかも動物柄の服がいっぱい混じっているのだ。

こんな物を着るくらいなら裸で過ごしたほうがましだ、いや冗談です。さすがに裸になって解放感を味わうのは早いです。自分の身体を見て、悲鳴をあげる女性を見るのが楽しいという心境にはな

れません、なりたくありません。

「夏希、今日はどこに行く?」

朝食の席でアベルがかわった果物を頬張る夏希に話しかける。夏希は果物を一生懸命呑みこんで、嫌な顔をする。

「引きこもってたい」

「太陽の光を浴びないと健康的になれないよ」

「現代人の多くは家でゲームをしています、不健康バンザイです」

「えー、街を案内するからさ!」

街か、確かに興味はある。香ばしい香りや見辺りのよい物がたくさんあるだろう、きっとアベルに頼めば買ってくれるだろう。

だが、外に出るということは、つまり、その、嫌いな動物に会うということでしょう。そんな命をかけて行くのならば、外的からの攻撃がない部屋でぼーっと一ート生活を味わっていたい。

「大丈夫、街の人は人型で生活してるよ」

「でも元は動物だったわけでしょ、うーん」

確かに人と思えば普通に話せるし、触れるが何と言うのか。極端に動物が苦手の自分を直せそうにないのだ、頭ではわかっているが身体が拒否をする。

「見たこともないお菓子があるよ」

「・・・」

「甘ーいタルトにバターたっぷりのクッキー」

「・・・」

おいおい、お菓子で誘うなんて、夏だというのにコートで全身を覆つてマスクとグラサンをつけ荒い息をしている変なオジサマが初々しい小学校の女の子を自分の車に乗せようとする常套句じゃないか。

私が食べ物ごときで動物に会いにいくと言つのか。まったく、人を子供だと思つてもらつては困る。私はお菓子を餌にそんな怪しい車なんて乗らないからな。

「行かせていただきます」

おいおい、プリーズウェイト、白い眼で見ないでくれ。目のやり場に困る。

ああ、そうですよ。私は食い意地がはつてますよーだ。  
人間、甘い物がないと生きていけないんだ。人間の身体の半分はお菓子でできているんだからな。

やつして私は食べ物を餌に城下へと行くこととなつた。

子供じゃないもん（後書き）

たぶん虹乃も

お菓子でついて行く派です・・

## 赤い果物は林檎です

賑やかな人通りをアベルは悠々と歩いて行く。国王の弟なのに自分の顔を隠そうともせずに、いつもの格好でいつものようにやる気なさげに歩く。

「おや、アベル様。今日は女の子連れてどこに行くんかい

「ぶらぶら」

「じゃあ、これ持つてきな」

身分の高い人なのに堂々と呼ばれていいんだろうか、国王の命を狙う人物に攫われたりしないのだろうか。

夏希が首を傾げていると恰幅の良いおばさんがアベルの名前を呼びながら夏希を見て、2人に屋台に並べていた物を投げた。投げられた物を反射的に夏希は掴む。見ると赤い林檎のよつな物だ。服でこすつてそのままかぶりついた。

「がふつ」

なんと林檎のように甘い果物だと思っていたのに、すくなくすくぱい。余りのすりぱに顔を顰めて口を押さえて蹲つた。そんな夏希を見てアベルは爆笑した。

「ちよつと、夏希。これ、知らないの」

「あ、当たり前でしょうが」

「ああ、そうだった。『じめん』『じめん』

笑われながら謝れても、懸命さが伝わらない。涙目になりながら睨むとアベルはようやく笑い過ぎに至つて出た涙を拭いて自分の林檎もどきを手で回す。

「これは、アショルつて言つて紅茶の中に搾つて入れるとすこく美味しいんだ」

そんなの、今から歩いて観光しますって人に渡さないで欲しい。人当たりの良いおばさんだったけど、つい恨んでしまう。

「いやあ、まさか歩き食こするなんて思わなかつたよ

ええ、ええ、すみませんね、マナーが悪くて。だって部活終わりはすぐお腹が減るんだ、そんな時、近くにコンビニがあつて美味しい肉まんやアイスがあるなら学校帰りに食べるのが醍醐味つてやつだ。

「うひそこわ

腹が立つて、アベルを置いて知らない街を歩いて行こうとするがアベルに腕を掴まれて手を握られる。

「離せ、ひい

「いや。じゃあ、お姫様、行きますか」

背中が痒くなる台詞を吐いて、手を差し出す。その手の平に手を置くと手の甲に酒を落とされた。

「ふざけ」

驚いて手を引っ込めようとするが、がしつと掴まれて所謂恋人つなぎをされた。指の間に入つて来る細くて長い指は指の付け根を撫でるよつて繋ぐので、ぞくつとする。

そんな夏希にアベルはにやりと笑う。

くそ、格好いいからって何をしても許されると思つなよ。なんか負けた氣がした夏希は部活で鍛えた腕力でアベルの手をぎゅっとする。

「いひ

ふん、からかう奴が悪い。ちなみに夏希な握力は男子顔負けの40キロ代である。

そんな夏希の手を握ったアベルは後悔して離そうとしたが夏希に手を力いっぱい掴まれていてるため外すことが出来なかつた。

赤い果物は林檎です（後書き）

久しぶりの休み  
外に出たくない＼（^皿^）／

## 牛の胃袋は4つ

夏希は満腹となつて、もう動くことが出来ない身体を柔らかな草の上に落とした。

食べ過ぎて気持ち悪くなるほどだ。こんなに食べたのは一昨日の夕ご飯のカレーぶりだ。つい最近じゃんつて?だって、いつも満腹まで食べるんだもん。

「夏希の胃袋って牛なみだね」

「うつさいわ」

「知つてた?牛の胃袋は4つもあって牛の第1胃は、植物の纖維を分解する役割があるんだ。牛の第2胃には、エサを食道まで押し戻す役割があつて、牛の第3胃は、水と栄養物を吸収するとともに、大きなエサをより分けて第1、2胃へと反芻する機能もある。で、最後は牛の第4胃。そこでは胃液の分泌があつて、人間の消化器と同じ役割があるんだ」

アベルが説明をしてくれるので私の頭の中は「牛のタンが食べた  
い」でいっぱいだった。『めん、女じやなくて、意地汚くて。

「乙女の胃には甘い物は別腹つてこゝものがあるんですね」

「・・乙女?」

「つざいわつー！」

「ど」が乙女なの、という視線はもう見飽きた。というか今更、乙女かよつていう視線が結構痛いぜ、びんびんくる。だがそんなことでは、へこたれないのが私だ。アベルの痛い視線なんて気にしないで、一休みして小腹が空いたらまた強<sup>ねた</sup>請るのが私さ。

もちろんお金はアベルが出してくれたので、いつも小遣いが食べ物に使われ、お菓子を我慢しなくてはならない夏希の財布事情とは違つから、ついつい食べてしまう。

「そんな食べなくても毎日連れてくるのに。今食べちゃうと楽しみ

が減るよ

「何を言つてゐるんだね、アベル君。今日は昨日とは違つ」

「はい？」

芝居がかつた夏希の科白にアベルは耳を疑つ。こいつ、大丈夫か  
といつ視線つきで。

「そんな日で見るな。つまりはね、毎日といつものは雲のようなん  
だよ。今日の雲はほら、人間みたいな形じゃん」

空に浮かぶ雲に向かつて指をさす。その雲はまるで人間の横顔の  
ような顔をしている。

「ほら、だんだんと形が崩れて來てる。この形に似たような物は明  
日にできるかもしね、けど同じものじゃない。つまり、同じ物  
は一度とできないってことだよ。だから今日食べたお菓子も同じ製  
法、同じ味かもしれないけれど、明日になれば少し違うかもしだ  
いってことや」

だから毎日お菓子を食べているという訳じゃないぞ。ハンドボーラ  
はすごく動くんだ、お腹がすくんだ。だから、その分を何かで補  
給しないと倒れてしまうんだ。

「へー、結構頭はあるんだ」

「失礼なつ！確かに部活少女だが勉強はちやんとしているが、そういうと母にお菓子を没収されてしまうんだ」

以前に物理で赤点をとってしまった時といつたら、身体ががたぶるだ。家中という家の中のお菓子を隠され、お小遣いは貰えないから食べ物も買えず、しかも根回しをした母により友達も近所の人たちもお菓子を分けてくれなかつた。

もう涙が出たね、禁断症状のせいで頭が狂うかと思つたくらいだ。それからはきつちりと勉強をしている。テストで良い点を取ると母が有名なケーキを買ってくれるのだ、あの味は神にしか出せない血さだ。

いやあー、今となつてはいい思い出だ。遠い目をして、また形を変えた雲に田を移す。気持ちの良い風が夏希の前髪を撫でた。

ゆつたりな風と優しい口差しが当たるため夏希は瞼がだんだんと

落ちていく。

あまりの心地よさに由田になってしまった時だった。

「…ねえ、夏希は親に大切にされた？」

「そ、だね」

急にアベルが質問をするため寝ぼけたまま答えた。

「うちには弟がいるんだけどね、生意気で。うちの母は私と弟を大事に、大事してくれてるよ」

「そ、う・・いいな」

アベルの呟きは風にさらわれて夏希の耳に届くことは無かった。

## だって君は3位だもん

もつ意識が夢の国に飛び立つてゐる時だった。田の前に大きな苺のケーキが現れ、夏希が大きな口を開けて食べようとしたその瞬間、アベルの声が夏希を現実世界へと戻した。

「やるそろ行こうか」

「ふ、へ・・うん分かった」

口から出せうになつた涎を押さえて、ゆっくりと立ち上がつた。  
くそ、あと少しだったのに。あんな大きいケーキは一度とお田にかかるない美味しそうなケーキだつたのに。

ぐぬぬ、と悔しそうな顔をしてゐる夏希を見て、どうせ食べ物のことだわ〜と思つてゐるアベルには気付かなかつた。

「たつだいま」

元気良く、門番に挨拶をする。今の姿は大きな「」つい顔の人型だが本来は「ゴリラ」と聞いた。だが、人型ならきっと大丈夫、若干へっぴり腰になりながらも手を上げてアベルと一緒に門を通る。

「ゴリちゃん（夏希命名）は軽く会釈をしただけだったが夏希はより一層手をぶんぶんと振る。

「・・子供だねえ」

「高校生はまだ子供です」

びしつと親指をつきたてながら満面の笑みを見せる夏希に小さな声で呟く。

「いや、俺が言つてるのは精神レベルがあつ・・・」

「ええ？何ですか？夏希ちゃんは可憐うじいって～デウモアリガトウ」

最後の方が機械のように感情を込めずに言いながら、顎を押さえて蹲るアベルにつっこり笑いかける。その右手は硬く結ばれており、甲が少し赤くなっていた。

「暴力反対」

「愛の鞭です」

夏希はアベルを置いて城の中へと戻つて行った。その後ろ姿を見送るのはさらに愛の鞭を頭に受けて涙目になりながらも何故か喜々としているアベルと、それを遠い目をしてみているゴリちゃんだけだった。

だが夏希が自室に戻ろうと長い廊下を歩いている時だった。

メイド服を着たガゼルさんが大きな目をくりつさせながら、ところけさせる笑みで夏希を出迎えながら顔に似合わない爆弾を落とす。

ちなみにガゼルとは鹿に似た動物だがウシ科で砂漠に住んでいます。

「国王が早く執務室にきやがれと言つてますよ」

「……めん、聞き取れなかつた」

「国王が早く執務室にきやがれと言つてますよ」

「「1」めん、もつ一回」

「国王が早く執務室にきやがれと言つてますよ」

3度も同じ言葉を繰り返してもらつたことに罪悪感を覚えるが、  
どうしてもその言葉が頭に入つてこないのでから仕方がない。

「拍手は？」

「じゃません」

につつと笑顔つきで胸がきゅんとする。思わず胸を両手で押さ  
えてしまつたが、じりじりと後ずさりを始める。それに合わせてガ

ゼルさんも動く。

脱兎のじとく後ろを向いて走り出すがものの5秒で捕まってしまった。

そりゃそりゃ、足の速い動物で第3位の記録保持者だもん。時速86kmの動物にはどういつづけに勝てやしない。

後ろで手を押さえられながら、泣く泣く夏希はガゼルさんが執務室の扉を叩くのを涙ながらに見つめた。

## だって君は3位だもん（後書き）

ガゼルという動物を見たことはないのですが  
俊足といつ言葉に惹かれ、載せてみました^ ^

なにか

お薦めの動物がいたら教えてください

## シリスつて可愛いものなの

今、地獄の扉が重々しく開かれた。

「よく来たな」

「私は負けはしないぞ、魔王め。この正義の鉄槌を受けてみよ」

「・・馬鹿か」

せっかく勇者にならきったといつのに相手はのりが悪いです。

「馬鹿と天才は紙一重です」

「やつが、お前は馬鹿のほうへ傾いてしまったようだな」

「・・酷い」

残念ながら自分が持っているだけの語彙力では強敵を倒すことができません。だれか私に天才児を味方に下さい。

「とまあ、前戯はこれまでにして。用は何でしょう」

首を傾げながら銀髪の国王、フランシスを見つめる。何か怒られるのをしただろうか？・・うん、いっぱいした気がする。例えば変態と呼んだり、変態と罵ったり、変態と蔑んだりしたことだろうか。

だがフランシスは夏希が予想していたこととは違ったことを言った。

「何故、私に黙つて城下へ行つた？」

「え？」

「黙つて城下に行くなどと聞いていなかつた」

「・・・」

何で自分の行動をいちいち赤の他人に言わねばならんのだ。  
しかも自分が行きたいと言つたのではない。  
無理矢理、君の弟であるアベルに無理矢理連れていかれたのだ。  
不可抗力だ、むしろ拉致だ。

最後の方は自分から進んで屋台で食べ物を強請りまくったのだが、  
それは棚に上げておく。

「アベルに文句は言つてよ」

「でも私に黙つて行つたのだから」

「だつてアベルが言つてゐと申つたんだもん」

頬を膨らませて反論すると、フランシスがじつと見つめる。何故か潤んだ瞳で。

「お前は本当にシマリスに似ているな」

「黙れ！」

勢いよくつっこみでしまつたが、よく考へるとシマリスとこののは可愛いものではないか。

「しかも繁殖期中の」

「死ねー！」

シマリスのメスは繁殖期になると頬を膨らませ鳴き声をあげるらしい。

繁殖期で、ちょっと待て。私は年中発情期のメスではないし妄想に生きているわけではない。

「何故だ、私は可愛らしいと思つてゐるのだぞ」

「あんたの基準は一般人とは違つんじや」

夏希は手に持つた袋を鍛えた剛腕で投げる。さすがハンドボール部の部長であると言つべきだらう、その袋はフランシスの顎にヒットした。

ただ袋の中に入っているものは柔らかいため、さほどダメージなどないが今まで人に物を投げられたことなど無かつたフランシスは精神的にダメージを受けた。

「！」の鹿め！

悪口なのだろうか、分からぬ言葉を残して夏希は出て行つた。

後に残されたフランシスが袋の中を見るとフランシスの好きな伝統料理、ファリイニがまだ温かさを残したままあった。

ファリイニは林檎を甘く似てパンに挟む食べ物だがフランシスは昔からこれが大好きだった。

まさかこれを買いに行つたのだろうか。  
自分勝手な勘違いをしながらもフランシスはファリイニを一切れかじつた。

「・・・やつぱつ皿こな」

悪いことをしたと感じながら食べるには『気が引けたが、最近食べてこなかったフアリヤーを口こつぱいに含んで変わらぬ味を楽しんだ』。

燃えぬきたよ、真ひ由じな

夏希は苛々のため、早く寝ることにした。何で私が怒られなきや  
ならないの、頭の中はそのことだけばいだつた。

せめてもの反抗にベッドに置いてあつた枕を全て投げて、そのまま  
ま枕なしで寝ることにした。

朝日を受けて自然と目を覚ます。

人間、どんなに苛々していても寝れるらしい。全く欲望に正直な  
身体である。

夏希はふかふかした枕を引き寄せて頬をすりつける。

「ふかふかしてるう」

肌触りが良すぎて語尾にハートをつけたいくらいだ。

しかも人の体温と同じように温かくて、それがまた眠気をそそる。

だがちょっと待て。確かに私は枕を全て投げたはずだ。しかも枕が温かいわけないし、手の平にのるようなこんなに小さいわけがない。

途端に冷や汗が背中を滑つた。

「ま、まさか」

うつすらと目を開けてその正体を見ようとすると視界いっぱいに白いものが広がる。

そのまま相手に気が付かれないように離れようと、ゆっくりと後ろに下がる。

だが相手はそれに気が付いたのか、離れる人肌を惜しそうにさちらにくついてこようとする。

耐えることができずに飛び起きた。  
相手も驚いて2人そろって一気に起きた。

夏希はベッド端によつて相手が何かを確信した。

田へ、もしもこした赤い田をしたジョージだ。それ、あの時、フランスから逃げようとした時に入った部屋にいっぽいいた尻の中の一匹だ。しかもこいつは嫌がる夏希にすり寄つてきたジョージじゃないか。本当の名前は分からぬがジョージで反応したからジョージだ。

ジョージは夏希が起きたのが嬉しいのか、ベッド端で震えている夏希に近寄る。

「すとおつپふ」

夏希が停止の命図を出すにもジョージは一步一步近寄る。

「止まれ、止まるんだ。やうしなこと私は燃え延きて真っ白になつてしまつ」

ジョージにかけて、あの有名なヤツフを改良したがジョージ、君なら分かるだろ？

だが思こは虚じへ、ジョージは思い切り飛び跳ねて夏希の胸にダブした。

「ジョージイイイイー！」

朝からの叫び声にフランスが扉を蹴り破ると、そこには兎に抱きつかれながら放心している夏希がいた。

ジョージはメイド頭の兎さんに抱きかかえられながら朝ご飯を涙目でちびちび食べている夏希を赤い目で忙しなく追っていた。

「う、う、ジョージがまだ見てる」

兎さんに抑えられていなかつたら絶対に夏希に飛びかかってきているだろ？、ジョージの動きを見ながらパンをかじる。

「すみません、夏希様。ジョージは夏希様が大好きなようだ

「嘘だ」

「こ、本当に。ほら、今にも飛びかかるとしてこなでしょ」

「鬼ちゃん、絶対離れないで」

その途端にジヨージは身体をだらつてやが、長い耳をたたず。

「あ、ありあり、拗ねてしまいましたわ」

私も拗ねたいよ。だがその心は誰にも聞けない。

燃えぬきたが、眞ひ田正（後醍醐）

いや、それって昭日のジョージじゃなかつたか？  
ジョージと似てるけど違つわー

ま、いつか

## 嫉妬は怖いものだ

そんな兎さんとジョージと一緒に話しながら、飯を食べっこると、また勢よく扉が開けられる。

「デジャブだ、」と思つてみると見覚えのある男が夏希の部屋は自分のものだといつよつに入ってきた。堂々としているだら、ところづき葉は置いておくれといふ。

「今日せどりに行こつか」

アベルが朝食中に入つてきて夏希の隣の椅子に図々しく座る。そして夏希の皿から摘まんで自分の口に入れれる。

「行かん」

「あ、城探検がいいの?」

「部屋から出る」

「じゃあ、どこから行こつか」

「人の話を聞け」

駄目です、やはり宇宙人に言語は理解できない模様です。これじゃあ「ミコニケーションもとれず」に人類は侵略されるしかありません。

いや、まだある。言葉が通じなくても伝えられる方法がある。

「俺の俺の俺の話を聞けーえ。一分だけでもいい。お前だけに本当のこと話をすから」

「じゃあ行こうか」

沈没であります。誰だよ、音楽は万国共通つて言った奴。音楽が通じない野郎がいるんですけど。

アベルが夏希の口に焼けた腕をとると猫のような鳴き声が聞こえた。

ジョージが鬼さつの腕の中で耳をぴんと立て足を動かしながら威嚇している。

「ああ、トライに行きたいの？」

「夏希、酷いよ。彼は俺に嫉妬してんの！」

「うーーー？」

「・・嫉妬ね」

「嫉妬って、あの顔にやつてこる女達が男を取りやつて、あの手この手を使って相手を貶めようとする、あの嫉妬ですか？」

「セレニまでじやないと悪ひナビ」

「なんて感ひしこトー。」

夏希は手を口元にやつ、昔の少女漫画みたいに口元にしたことに

うだが出来なかつた。元々そんに睫は長く無いし、田の中に星もないのだ。

なんて子なのかしら。こんな小さな身体に憎悪が詰まつてゐるのね。そして、相手をどんなふつに絶望へと突き落とすか考えているのね。

まさか、その小さな前足にはカミソリが。もしかしたら床に画鋲が落ちていて踏ませる気なのね。

「末恐ろしい子」

夏希はまた言ひ渡してジョージから距離を取つて、恐怖で震える。まるで恐りしい物を見る夏希にジョージの耳が激しく垂れ下がる。

「相手ながら可哀想すぎる」

「いやいや、恐いのは裏工作してこるジョージだしょ」

「…ジョージ？」

ジョージは誰だとこいつ見て見るが一人、いや一匹しかいない。夏希は兎さんに抱えられているジョージを指をして教えてあげる。君の濁つた瞳にはジョージが見えないのかね、ほひ、心の田みてじりんよ。

「名前つけたの？」

「ううん、ジョージって呼んだら反応したからジョージって名前か  
と思つてたんだけど」

「ああ、つけちゃつたんだ」

え、いやね、宇宙人君。私は名前なんかつけてないって言つてる  
のに君の耳はお飾りなのかな。犬のくせに耳が悪いって駄目でしょ。

**嫉妬は怖いのです（後書き）**

今、思ったが夏希って思いこみが激しい・・

う、動けない

あちやーと額を押さえているアベルに何だか腹がたつて頭を殴ってしまった。何なんだ、私にも説明をしてくれないと分からぬじやないか。私だけ知らないなんて、のけものにされた気分なのだ。

「痛いよ、夏希」

「私の心も痛いのだ」

「どうせ棘の生えた心ですよ」

「聞こえなーーーああーーー」

子供のように耳を塞いで席を立つて逃げ出した。

「…………」

アベルの制止を押しきつて（殴つて）逃走したのはいいものの、また迷つてしまつた。

おかしいな、自分は方向音痴とは無縁のはずなのに。なんで、どこに行つても同じ壁だし、同じ扉しかないよ。

「…………? 私は誰?」

悲劇のヒロインを氣取つて手で顔を覆つて崩れ落ちて見せるが誰もいない。・・・さて、馬鹿なことなんてしてないで、誰か人を探そう。

きょろきょろと辺りを見回していくヒューイー・ルーとまるで息を吐くような声が聞こえる。けれど、どこから聞こえているか分からず、近くの扉を開けようとするが何か違う気がする。

「・・いや、まさか」

わおっと見るとジョージが顔をあげながら「やあ、ここにちは」などと嬉しそうに見ているのだ。

そんな表情が分かつてしまつ自分が嫌だ。

「ジョージじゃないか。いいかい、ジョージ。私達の間で協定を結ばつじやないか。私のテリトリーはここからここまで、この中か

ら入なんじよつじよつ

夏希は腕を広げて自分の領域を主張する。それから人さし指を突き立てて、兎相手に本氣で言つ。端から見ると危ない人だが、ここは自分のいた世界ではない。多少のおかしさは皿を瞑つてもらおつ。

ジョージは分かつてくれたのだろうか、小さく首を動かした。

「ジョージ、分かつてくれたか！」

あまりの嬉しさに膝をつき両手を広げるが、もちろんカモンという意味ではない。ただのノリだ。

だがジョージはやはり動物だ。夏希の思いを汲み取ることができずジャンプして夏希に飛びついた。

「つづ、むー！」

小さくなつていたのが悪かつたせいか、ジョージが勢いよく跳ねた先には夏希の顔があつた。

ジョージのピンク色の鼻が夏希の脣にぶつかつた。

しかも赤ちゃん兎といつのに力が強く廊下に押し倒された。その

まま鼻を押し付けられたままなため、夏希は触ることもできず、悶えることしか出来なかつた。

端から見ると、背中を廊下につけ腕を天に上げて、ふるふるしている。その姿は何だか、悪役が味方にでも裏切られて殺され、死にたくないと言つているような姿だったが、見ている人は誰一人いなかつた。

## ウリガメ（前書き）

食事中の躊躇まは  
「」飯を終えてから見る方がいいかもしねない・・・

呼吸も何もできずに夏希が真っ青になつていると、ベリッヒジョージが剥がされた。最後の方は抵抗して夏希にしがみついていたが剥がした相手を見て動きは止まった。

「大丈夫か？」

「・・もう嫌だ。帰りたい。いや、土に還りたい。先立つ不孝をお許し下さい」

「ちょっと待て」

「止めるな、フランシスよ。私は潔く土に埋まつてくる」

まだ、ふるふるしている身体をなんとか立たせて外へと向かおうと歩み始める。

人生、まだ4分の1も過ぎていなかつたけれど肉体はもう100歳を超えたかのように疲れたよ。ああ、一人で私と弟を育てくれた母には感謝しきれないが先に天国で待つてあります。

そのまま本当に死にやつた夏希の腕を掴んで思考を一ひらくと戻される。

「死ぬな、まだ早いぞ」

「いいえ、私は生涯、動物と馴れ合いをしないと誓っていましたがその約束を早々と破ってしまいました。これは死んでも詫びせねば償いきれませぬ」

「誰に誓ったんだ！？」

「近所の駄菓子屋さんの金色に光る招き猫です」

「…戻つて」

頭をがくんがくん揺らされて夏希の脳みそが揺れる、揺れる、揺れまくる。

「う・・すと・・や、やめ・・やめんかああ…」

夏希は頭を揺らされた気持ち悪さから手加減なしにフランシスの顎に拳をお見舞いしてしまった。何かいい音がした、そして呻き声も。

だが夏希も気分が悪く蹲る。今にも吐きたい、だが女の子は我慢だ、我慢。

女の子は授業中にトイレに行きたくても我慢するんだ。せつだ、これくらい我慢できる。

「だ、大丈夫か？」

自分も痛む顎を押さえながら、フランシスはジョージを片手に夏希の背中を抱きしめる。優しさにためへ瞬間だが、夏希は手を口に当て涙目で訴える。

「う、うう・おこえ、じいっ。」

「おこえっ。」

夏希は限界が迫っていた。

それなのに、その姿を見て悶えている奴が夏希の我慢を超えてしまつ。

「・・おおう、ウミガメが産卵時に見せる涙のようだ

ちなみにウミガメが産卵時に泣いているように見えるのは体内に溜まった余分な塩分を排出しているために出るのだが、そこは置いておこう。

「誰の子だ？」

「・・あ？」

「誰の子を産もうとしているんだ

「・・・」

夏希の頭はすっと冷えて、殺人を犯すような目でフランシスを見る。

そして自力で立ち上がり、近くの部屋を開けるがそこは何も置いていない場所だった。ならば、と次の扉を開けるがそこは衣装室だ。

「お、おい」

夏希の突然の行動についていけなかつたフランシスだが、次々と扉を開ける夏希を見てやつと不審に思つ。

そして後をついて行くが夏希はフランシスを見よつともしない。そのため、フランシスは夏希の顔をこちらに向かせた。

「何故、見ない？」

「うひ・・・ヴメ」

「ヴメ？」

その瞬間、夏希はフランシスの服に吐いていた。  
せつかく我慢したのに、こいつのせいで乙女の品格が失われた。



まだ廊前とこりのにカーテンは閉められており、夏希はベッドで布団にくるまつていた。

「夏希様、お開け下せー」

メイドの兎さんの声が聞こえたが夏希は動きもしない。

「夏希様、フランス様も謝りたいと仰つております」

「・・会いたくない」

扉越しに夏希のか細い声が聞こえた。通常では聞こえない声だが兎さんの耳は高性能だ。

「夏希様の好きなお菓子もござりますよ」

「こひなー」

その言葉に兎さんは口元に手をやり、わなわなと震えだした。まるでこの世の終わりのような顔だ。

「な、夏希様が食べ物に釣られないなんて。そんなの夏希様ではあります」

りません」

その言葉を扉越しに聞く夏希。

確かにさつきまでだつたらお菓子に釣られていただろう。

しかし今は食べたくない。

リバースしたばかりなのだ。

それになげなしの乙女心も傷ついたのだ。

本当にもう家に帰りたい、もうこんな国なんて嫌だ。

鬱々と人差し指でのの字をずっと書く。

カリカリ

へのへのもへじ、ののの、へのへの。

カリカリ

「ん？」

窓から微かな音が聞こえる。

むくりと身体を起こして薄暗い部屋を見渡す。

動物がモチーフのカーテンを開けた。

「ジョージ？」

窓のさっしにジョージが立つて前足で窓をカリカリしていた。

「…何人たりとも、この私の心の壁を越えることを出来ない」

そう言つてカーテンを再び閉めるがカリカリと窓をかく音は止まない。

「…」

そう言えば、この部屋があるのは2階だつたはずだ。それなのに、どうやつてジョージは上つてきたのだろう。兎のジャンプ力、舐めんなよ。と言つても高がしれている。

もつ一度そろつと覗いてみる。

「・・なこつ」

ジョージは指の幅しかない窓の隙間に足をのせている。  
やけに毛が揺れているな、と思つていたが風のせいだと思つた。

「つて・・弓を返せ」

しかし、いくら訴えかけてもジョージはその場を離れようとしない。  
命の危険もあるところの上。

「ジョージ、帰るんだ」

窓をかく音は途絶えない。

「・・もしや入れて欲しいの?」

突如、音が止まった。

うん、これは窓をかくのが疲れたんだな。なんて思つわけない。

「ジョージ、私は落ち込んでいるんだ」

そんな時にジョージから逃げるといつ体力は使えない。  
さりに落ち込んでしまつ。

だが外の風が気になる。

ぐりぐりとジョージの小さな身体が揺れる。

「帰るんだよ、ジョージ」

だが全く帰らうとしない。もしかしたら木には上ったが下りれなくなってしまった猫パターンか。

びゅうびゅうと吹く風が気になる、もしかしたら死んでしまうかも。

やつと思つと自分の辛をなんて脇に置いだ。

「ジョージ、入れるから待つてくれ」

窓を開けようとしたが問題が発生した。なんと窓が内開きではなく、外開きだ。

「・・・」

「これは不味い。」そのまま開くとジョージは落トロースだ。

「ジョージ、タイミングを合わせよ。君と私なら出来るはずだ」

ジョージに真剣に語りかける。

「私が合図したら、ちょっと横に高く跳んでくれ。窓を開けたら直ぐに私が君をキャッチするから」

顔を縦に振つたジョージを見て、唾を飲みこむ。

「こう、この、そこー。」

勢いよく開けるとジョージが高く跳んだ。  
そしてゆっくり落ちてくるジョージを両手でキャッチした。

「 ぬあああああ 」

声にならぬこ声を上げて、ゆくへつじゅうページを下ろした。

ジョージを慎重に下ろすと直ぐにベッドに腰かけ上がり、布団に丸まつた。

「・・・」

ジョージはその場を動こうとはせずになんだか寂しげにこちらを見ながら下がる。

風により乱れてしまつた毛並みと寒さでだらうが、震えている。

「ジョージ、寒いん？」

「べりと法えながら頷くジョージを見ると自分が悪代官のようだ。お主も悪よのう、と言いたいが相手はジョージだけだ。こんな冗談なんて分からぬ」だろう。

「・・おこでよ」

布団を広げて手招きする。

ジヨージはびっくりしたよつて見るが恐る恐る近寄つてきでベッドにぴょんと跳ねた。しかし、それでも後数歩とこつてひりで止まつた。

動物が苦手といつ夏希に遠慮してくれているのだらけ。小さいといつになんてできでいる子なんだ。

こんな子に氣を使わせてこる自分が恥ずかしい。

「い」めんね、ジヨージ」

やはり躊躇があつたが自分から手を伸ばしてジヨージの頭に触れた。

「柔らかいな」

手のひらで触ると、余りの小ねれに驚く。

手の中のジヨージは夏希が触るとびくつとしたが遠慮がちに触れる夏希の手に身体をこすり合わせる。

「う、あんま動かないでよ」

やうやうとジヨージは言葉を理解してこるらしく動きを止めた。

「ハハシヒルと可愛いんだけどなあ」

動物は何を考えているか分からぬいため、どうすればいいか分からぬのだ。

「ねえ、ジヨージ。君は何を考えてるのかな」

答えるなど返つてくるばずがないがないと分かつていてのだがつい話しかけてしまつ。

「ねえ、動物が言つていることが分かれば少しあ好きになれるんだけどなあ」

ねえ、というが返事を期待してゐるわけではない。

だけど思つのだ。

動物の言つていることが分かれば少しあ仲良くなれるの。どうして鳴つてゐるのか、どうして耳をひんと張つてゐるのか。

人間のように話せねばいいのに。

「ジヨージは夏希様が大好きだ、と言つてますよ」

「ふぎや ああああああああああああああ…」

突然、耳に入つてきた声に大声を上げてしまった。

後ろを振り向くと、なんと顔に笑みを浮かべた兔さんではないか。

な、なぜここに。

そんな夏希の表情を読み取り、豊かな胸から金色の鍵を取り出した。

「魔法の鍵！－！」

「・・合ひ鍵ですわ」

なんでもいつも、この国の人達はノリが悪いんだろう。

「ジヨージは夏希様に一目惚れだそうですね」

しかも驚きの余り、変なポーズをとっている夏希をスルーすると  
いつ無視スキルが高い。

しかしスルーされたといつ事実は今は置いておいて。

「一曰惚れ！？ 誰が誰に、何のために？」

「一曰惚れに目的などあるのですか？」

「ないけどさ、君の瞳に本<sup>まこと</sup>気で恋する2秒前」

「意味が分かりませんわ」

「ごめん、兎さん。自分でも分からぬから説明出来ない。

「つて、えーーー！」

いやいや、いくら鈍いと友達に言われる私でもここまで言われれば分かつた。

ジョージはアベルが好きなんだ。

だから私の邪魔をしてるんだ。あの時もアベルとくつつかないようには私にわざとくつついて見張つていたんだな。

ジョージって雄だけどアベルが好きなんだ。でも諦めてはいけないよ。この国では分からなければど他国では同性の結婚が認められるところがあるからね。

どうして、そうなるのか、夏希の思考は誰にも読めない。

うんうんと頷く夏希を見て、兎さんとジョージはやつと分かってくれたかと目を輝かせる。

「私、応援してるよー！」

「・・・はい？」

どうして本人に好きと言つて居のに応援などされなくてはいけないのか。

彼女の頭の中を一回でいいから覗いてみたいものだ。

ジョージと兎さんは2人して赤い目を夏希に向かた。



春よ恋（後書き）

うふふ、おバカちゃん

それからジョージは朝から晩まで夏希に付き添つよつになつた。

最初は抵抗があつたものの、ジョージは夏希が嫌がることをしないで、しかも夏希の気持ちを汲み取るので、夏希はだんだんと触るよつになつた。

夏希が唯一触るにできる動物のため撫でたりしたのだが、それにより更にジョージがくつつく。

朝、夏希が起きるとベッドと一緒にしてお早のチューを鼻にする。

朝食の時は夏希の肩に器用に座つて頬ずりをして甘える。そして「飯を強請るため、夏希が野菜を与えていた。

昼は城をお散歩する夏希の後をくつつき、夜は一緒に寝る。

ジョージが人間だつたならば確実に甘い恋人同士であつただろう。

実際、使用人達も噂していた。噂といつよりも面と向かって本人達に言つていたが。

「まあ、夏希様とジョージは朝も昼も夜も」一緒に緒なのですね」

「はあ・・・」

「仲睦まじいですね」

「へえ・・・」

自分はそんなつもりはないのだが、そうだろうか。  
生まれてこの方、動物と触れたことがなかったのだ。だから付き合い方が分からぬ。

実は駄目なのだろうか。でも兎は寂しいと死ぬ動物つて言つし。  
うーむ、本人に聞いてみるのが一番だろうか。

「ジョージ、私達は離れた方がいいのだろうか」

それを聞くとジョージはピクリと止まり、なんとも瞳をうつむくつむくさせて見上げるのだ。

「僕が嫌いになつた？僕が嫌なの？」

そんな言葉が聞こえてくるよ」だ。

「へ、自分が血も涙も無い悪役になつた氣分だ。

そして、ひしと夏希の服を引っ張る。

「「あんよ、ジヨージ。もう一度とかんなことは言わない」

「あ、としがみついて離さないで絆を確かめ合ひ。僕達の絆は誰にも離すことができない永遠のものとなるんだ。

「・・何してんの?」

そんな2人に無粋な奴が。

だが私達の絆はそんな奴には負けない。

「おーい、夏希。聞いてる？」

それでも離れない2人を見かねて空気が読めない男が切り裂いた。  
ジョージを夏希から取り上げた。

「フーッ！！」

ジョージが威嚇の声を上げるが本人は素知らぬ顔。  
そのままポイとまるでそこにあつたゴミを捨てるようジョージ  
を放つた。

「ちょ、危なっ」

そんな夏希の心配は余所にジョージはくるりと降り立つ。  
運動神経は抜群だ。体操選手としてオリンピックで金メダルがと  
れそうだ。

「おおー」

「君さあ、たかが生まれたての子兎が俺に立てつく氣？」

ジョージの俊敏な動きに感嘆する夏希に対し、アベルは冷ややかな声でジョージに話す。

「しかも夏希は君のこと何とも思つてないからわ」

「ちよ、アベル。そんな言い方しなくても」

いくら好きな人でもそんなことを言われるのは辛いだろ。未だにジョージがアベルを好きだと勘違いしている夏希は不安気に2人を見る。

「君さあ、いくら俺の夏希の婚約者だからって調子乗らないでくれるかな」

「は？ 誰が誰の婚約者だって？ つうか、私はお前のものないわ！」

いつ夏希は婚約者になったのか、全く覚えがない。  
それなのに本人が知らぬ間に秘密文章でも提出されていたのだろうか。

そして日本は秘密裏の中、他国から攻撃されるのね、じゃなくて今は自分の話だ。

## 火花散る

夏希は向かい合つて火花を散らしている2人を交互に見るがどちらも動かない。

長く思われる時間が過ぎた（実際は10秒もなかつた）がアベルが動いた。

アベルは夏希の後ろに立つて年中部活で動きまわっているために無駄な肉がない夏希の腹へと手を回して寄せる。

「うおら、どこに触つてんじゃ」

顔面に拳を沈めようとするが両腕も一緒に抱えられているため、動けない。以外に力があるアベルに感心するが、それは違う人にやつてくれ。

「ほり、やっぱり分かってなかつたでしょう」

「何が」

「相手に名前を贈ることとは結婚を表すつてこと」

「・・・はい？」

「だから普通は男から女性に名を贈るんだけど夏希はその兎に『ヨージ』って名前を贈ったでしょ。だから夏希は私て結婚して下さいって意味。本当は両方が大人の時にするから、まだ子供な兎とは婚約つて関係」

夏希は何も言えず、開いた口が塞がらないとは正にこのことだ。  
夏希が唯一思つた言葉とは「異文化コミュニケーションは難しい」  
だった。

「・・いや、でも私さ、地球に戻るし。そもそも動物とは結婚できないしさ」

ジヨージには悪いが誰が動物と結婚するのだろう。確かに動物と結婚してもいいと言う人はいるかもしれないが夏希は違う。

だが振り返つた夏希を待つていたのは大きな瞳から流れる涙。ぽたり、と落ちた涙は床に小さな染みをつくる。

「ジョージが泣いてる…？」

どうしよう、こないたいけな子供を泣かせるなんて自分はなんて最悪な人間だ。生まれ変わった方がいいかもしない。

「う・・心が痛い」

「大丈夫大丈夫、あんなの嘘泣きだから」

心の無い奴が悪魔の囁きを耳元するが私は悪には屈しない。  
こんな綺麗な涙を流す子供がいるか、いやいない。って、それだと否定してゐよ。

自分に突っ込んで、もう一度ジョージを見る。

「つむ、まるで真珠のような涙じゃ」

「夏希つて詩人？」

「うん、今、用覚めた」

茶々を入れてくるアベルはさておき、夏希はジョージを抱き上げて視線を合わせる。

「多分、歳が違つよね」

「そうだね、ジョージはだいたい人間で言つといふの9歳位かな」

やべえ、自分、こんな子に手を出したら犯罪じゃん。9歳という

と小学生、夏希とは7歳もの年齢が離れている。

うわあ、友達がいたら「夏希のロリコン」って言われてたな。遠い目をして回想するが、つるるとしているジョージの瞳を見て現代へと戻る。

「おつと、そうだね。多分ジョージが大人になつてゐる頃には私はおばさんになつてゐるんだよ。それに色々な出会いがこれから先、ジョージには待つてるよ」

あの時に間違つて入つてしまつたベイビー兎の部屋を思い出す。あんなにいたのならジョージは選び放題だ。

きつとハーレム状態だね。

だけビジョージはふるふると顔を振る。しかし、言葉が通じない夏希には何を否定しているか分からぬのだ。

アベルは分かつてゐるのだろうか、顔を向けるが意地悪くあからさまに顔を背けた。

「うおーい、その顔は分かつてゐるだろう。いいから教えんか」

「ええ、やだ。だつて言つちやうとせ、つまんないじゃん」

大の男が「じゃん」なんて言つても可憐さの欠片もない。むしろキモイに相当する。

「では、私が」

「うわつ！」

なんと兔さんメイドが真後ろに立っていたではないか。何でここ  
の屋敷の人達は人を驚かせるのが好きなんだ。

そう思つている夏希の腕からジヨージを受け取つて、代弁してくれた。

## 満月の夜

「がきけない、というか夏希には伝わらないジョージが言わんと  
していることを兔さんが語り出した。

「夏希様が言つた年の差なんて関係ない。それにもうすぐで大人に  
なるつて言つてますわ」

「いやいや、大人つてまだ先でしょ」

「いえ、ここでの大人は人型になれるかです」

「人型?」

「ぼわわーんと頭の中でフランシスのことを思い出した。鹿から人  
間・・のおおおお！－は、はだ、はだだだ、奴は裸・・・いら  
んことを思い出した。

「ごほんと咳払いして夏希は赤くなつた頬を押さえた。  
つまり、小さい時は動物そのままの姿だが大人、つまり人間の姿  
になれると大人として認められるそうだ。」

「大人つて直ぐになれるんだ」

「それぞれですが、だいたい15位でしょうか」

「じゃあ後ろ年もかかるよね？」

「ジョージは直ぐに大人になれそうですね」

「なんで？」

「愛の力ですわ」

ぼくぼく、ちーん。

なるほど、ジョージはアベルに恋してるから早く大人になりたいんだ。

ん・・?となると訳も分からず勝手に婚約などしてしまった夏希は邪魔者でしかならないのではないか。

なんて空気が読めない奴なんだ、自分。

申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

しゅんとしてアベルとジョージを見る。

「2人とも、ごめんね。邪魔者は消えるから」

「は？」

ジョージもアベルも分かつていな様子で首を傾げる。  
ほら、息がぴつたりだ。

「だから、『じめんつて。愛し合つ2人を切り裂いていたなんて私つて、なんて空気が読めてなかつたんだろうね。生まれてきて『じめんなさい』」

「・・・いや、今の方が空気を読めてないよ。ジリコウヒトヘ..」

「え、私の口からわざわざ言わせたいのですか」

「・・・夏希の思考は俺達には理解できないほど常人とは異なつてゐるからね」

もしや、褒められてる。じゃじゃしながらアベルを見るが、アベルはまるで先生が物覚えが悪い生徒を見守るような生温かい目で見ていた。

「・・・その田つて馬鹿にしてる?」

「いや、夏希の頭を一回見てみたいって思つてるだけ。で、何だつて。俺とやつの子兔が愛し合つてゐて、その口は言つてゐのかな?」

夏希の小さく、水水しい唇を見つめながらアベルは微笑みながら

言つ。夏希はアベルの目しか見ていなかつたため、彼の口元が全く  
といつていいほど笑つていなかつたのを見ていなかつた。

真一文字に唇がきゅっと結ばれているのを夏希は勝手に脳内で繰  
り広げられていた妄想により見逃してしまつたのだ。

「だつて、満月が出ている夜、ちょうど厚い雲が明るい満月を隠し  
た時に2人は噴水のある場所で密会を重ね、ジョージが『まだ子供  
だけど、そしてアベルは王族だけ側にいることを許してもらえま  
すか』って言つて、そんなジョージにアベルが『馬鹿だな、王族な  
んて関係ない。大事なのは今、この瞬間だ』って、そんなこと言つ  
唇は塞いで・・・」

「このお頭<sup>つむぎ</sup>には何が入つてゐるのかな」

がつと夏希の頭蓋骨を驚撃みにして夏希の頭を揺らす。  
あわわと前後左右に揺れる身体をなんとか保たせながらも夏希は  
横目でジョージと兎さんを見る。

そこには完全に固まつたジョージと肩で笑つてゐるが表情には出  
していない兎さんの姿がそこにあつた。

## 残念な頭

ぐわじぐわしと頭を揺さぶられ、脳が揺らされて気分が悪くなつていいく。

またリバースするのはどうしても避けたいお年頃だ。

「や、やめてえ。お代官様、頭がぐるぐるします。世界が回つてます」

「一度、夏希の脳みそを壊して新たな脳を埋めつけたい気分だよ」

何か不穏なことを言いながら、アベルは手を離してくれた。  
だが、がつと肩を掴んで夏希の身長に合わせて自分も屈んで、視線を合わせる。

「ち、近いのですが」

「これくらいの距離で言わないと夏希の頭は理解してくれないと思うからね」

拳一つしか入らない距離でアベルが話すものだから、アベルの息が夏希の瞳を揺らす。

おおう、これはラブラブなカップルがすべきことであつて赤の他人がすることではない。

「いや、あのですね。一般ピーポーはそんなことはないのですが。  
」

「・・あのね、俺とそこの子兔は言わばライバルみたいなものなの。  
いい?絶対に恋人同士じゃないし、そんな妄想もするな」

え、私の抗議はシカツ テイリングですか。  
というか目が恐ろしいです、がたぶるです、全身が痙攣を起こします。

「え、沈む太陽を水平線越しに眺めながら浜辺で追いかけっこする  
のではありませんか。『待てよ、ジョージ』、逃げるジョージをア  
ベルが追いかけ、『ここまでおいでー』ってジョージが・・ふがつ  
」

「いい?次言つたら、この口、本氣で塞ぐから

「ぐくぐくとまるで首振り人形のように頷いて、もつそんな妄想は  
しないと誓つた。

これは本氣だ。次に何か言つたら本氣で塞がれそうだ。  
脳内に針と糸が浮かぶ。

上唇と下唇が一生「こんなちわ」しないように黙つた。  
だが頭の中ではジョージが女役でアベルが男役で変換されている。  
しかし、このことは口に出さない方が宜しいようだ。

ぶうたれながら、静かにしているとアベルが手を唇から離して頭  
を撫でた。なんか子供にやる仕草にむすつとしながらも傍観してい

る兎さんとジョージを見た。

「・・・視線が痛いのですが」

「いえいえ、微笑ましい光景だと思いまして」

「いい子だな、夏希は。ほひり、よしよし」

「離せんかいー。」

拳を振り上げると、よつやく頭を撫でる行為をやめたのだが、手は頭にのせられたままだ。

「私、高校生なんだけど」

「はいはい」

「テストで毎回10位には入るんだぞ」

「はいはい」

「ハンドボール部のキャプテンなんだぞ」

「はいはい」

いくら言つても離さうとしないアベルの足に蹴りを入れるがかわされた。

ぐぬぬ、なんか自分が小さく見えてしまつ。

「あらあら、ジョージが妬いていますわよ」

兎さんの頃に抱えられたジョージを見るが別段変った様子は無い。変わったといえば、今にも「ひかり」に飛びかかりそうで髪をぴくぴくと震わせているだけだ。

「・・普通じゃない?」

「夏希の田は腐っているんじゃないかな」

「はー! ? 視力、両方とも1・5ですけど」

友達はコンタクトやら眼鏡などしているが、夏希は裸眼で過ごしている。生まれてこの方、田に困ったことはない。

「い」ねん、夏希と話してると疲れる

呆れたような声に兎さんが同感しているのが見えた。

本当に疲れたような声を出すので夏希の脳裏には会社帰りの親父が浮かんだ。草臥れたスーツに身を包みながら電車に揺れて家に帰ると子供も奥さんも先に寝ている、という図だ。

「疲れるですと。な、なんとまあ、『愁傷様』です」

「夏希のことなんだけれどね」

その時、まるで雷が全身を走ったような衝撃を受けた。  
そのまま、ゆっくりと膝をついて倒れるが誰も起こしてくれない。

「あわわわ、私といふと疲れるですとな

「うん」

更なる打撃を受けて夏希は膝を抱えて座つた。  
そして床にへのへのもへじを書きだす。

「私といふと疲れるんだってえ。なら早く戻せよなあ。早く戻つて  
ハンドボールがしたいなあ」

ねえ床さん、と床に話しかける夏希を見て鬼さんとアベルはひいた。

しかし見捨てなかつたのはジョージ。さすが夏希の許嫁である。鬼さんの腕から抜け出し、静かに夏希の側に寄つて夏希を見上げる。それに気づいた夏希はジョージを抱きしめた。

「ジョージ、君だけだよ。ありのままの私を受け入れてくれたのは」

あまりの嬉しさでジョージの首元にキスをしてしまつた。  
その途端にジョージが淡く光つて夏希の両手に重みが増してジョージを持つていられなくなつた。

びっくりした衝撃で瞳が閉じる。

だが何か生暖かいものがくつついているのを感じ取つて目を開け

ると、そこに天使がいた。

「ほうえええええ！？」

金髪の美少年は赤い目を嬉しそうに輝かせながらも色白の腕を夏希の首に回した。

「え、ええええええ！？」

頭がついていけずに悲鳴を上げる。

しかも、ちらりと下を見るところの少年は裸だ。首元に絡みつく腕はすべすべしていて肌触りが心地よい。

「会いたかつた、夏希」

「はうわ！ななな、なんて完璧な美や」

見た目にして小学生程の少年はまるで地上に降り立つた天使、いや女神様や。少年という年頃でありながら、すっとした鼻筋や甘いマスク、まだ肉という肉すらない少年を見ると将来が楽しみだ。だが待て、君は誰だ。こんな美少年なんて見たことないぞ。

あわわとアベルと兎さんを見るが2人も突然現れた少年に驚きが隠せないようだ。

「夏希、夏希、夏希」

何だか少年だといつていつたんな色っぽい顔を出せなんて、で、できる。この子できるよ。

「え、えと、どう様でしょつか?」

途端に天使の瞳が曇る。

「ああ、『めんね』めん。お姉さんが悪かったね」

こんな美少年を泣かせるなんて年下好きの友達が見ていたら殺されていたところだ。

「夏希、僕のこと分からぬの?」

「いや覚えてますとも。ま、あれでしょ、あれ。えとこの間、会つたつけ?」

苦し紛れに泣いた少年はこぼれ泣き出してしまった。はわわ、綺麗な瞳に涙が。

「『めんね、お姉さんが悪かつたよね。だから泣き止んで』

「やだ」

「ふええん。お姉さんも泣きたこよ」

「じゃあ、チューして」

「ふえ？」

「チューしてくれば泣き止む」

涙目ながらのお願いは夏希のハートを貫いた。まさしくキューピットの矢がズキーンと夏希の心臓を貫抉り取ったようだ。

「鼻血が、ぐはあ」

鼻を押さえながらきめ細やかな頬に近づけたとした時、夏希の頭が掴まれて少年と離された。

ぐきつと首の骨が鳴つた。

苦痛に顔を歪めさせながら張本人を見上げると天使君と睨み合つてゐる。

微かな舌打ちが天使の口から聞こえた気がするが氣のせいだろ？。

「いきなり何すつとよ…私の首が良き音したとよ」

だが夏希の頭を掴んだまま離さないアベルは聞いていない。

「…おーい、アベルさん」

だが何の反応もせずに頭も離さない。

何がしたいねん、突つ込みたいがまた反応してくれないのだろう。

ちらりと鬼さんを見るも鬼さんは先程より笑みを深めて見守つているだけだ。

仕方がないので見知らぬ天使君を見る。

「えと、天使君・・・？」

「天使って僕のこと、夏希？」

「ぐりと頷いて申し訳なさそうに質問する。

「えと、私の知り合い？」

「本当に分からない？僕だよ僕、ジョージ。夏希が名前をつけてくれたじゃない」

・・・今日の『』飯は何だつけ？

あ、厨房の象さんがパリエって言つてたな。お腹すいたなあ。

「おーい夏希。現実逃避しないで」

目の前で手を振り振りとされて、はっとした。  
おつと大分トリップしてたらしい。

「なーつき」

ちゅっと夏希の鼻に柔らかいものが触れた。

「な、この兔が」

「ジョージだつて。夏希がつけてくれたんだから」

ふふんと偉そうとしている自称ジョージがアベルに目を向ける。何だかこの自称ジョージは外見は天使であるのに、なかなか好戦的だ。

「ぐつ、痛い痛い」

苛立つたアベルが力を入れるので夏希の頭蓋骨が悲鳴を上げている。

- ・誰かこのHンドレスな会話を終わらせて。

「そこまでですわ、アベル様、ジョージ」

やつと兎さんが夏希の必死のSOSを汲み取ってくれて、手を叩いて2人の注意をこちらに向かせる。

「アベル様、夏希様の首が大変なことになっていますわ。ジョージも大人になれたからと言つて、調子にのらないの」

2人は、ふんと鼻をならして互いにそっぽを向いた。

その仕草は同じだつたので本当は仲が良いのではないかと夏希は痛む首をさすりながら思った。

「どうか、ジョージって、あの白い兎さんのジョージ？」

## 「うん、そのジョージ」

嬉しそうに笑っているが、如何せん彼は裸ナウだ。直視できない。

これでも一応JKなんです。小学生の裸を見て興奮する子ではな  
いがこれだけの美少年だ。自分がいつロリコンの道に進むかもわ  
からない。

夏希は部活により汚れた自分のジャージの上着を脱いでかけてあ  
げた。

途端にジョージの目が輝く。

赤い目がきらきら、まるで本物のルビーのようだ。

「夏希、大好きっ！」

「ぐぼつ・・・・・」

小さな身体には似合わない程の力で飛び込まれたために、よろけ  
て床に尻もちをついた。

ぬつつ、子供の力を侮ってはいけないとは、このことだな。

「好き、好き、好き、大好き」

「あ、ありがとう・・・？」

なぜか大胆な告白をされてしまった。  
しかも、すじく身体を押しあてられ、もう全身で喜びを表現して  
くれている。

「もう、ずっと言いたかったのに夏希ってば分かつてくれないんだ

もん

ふくつと頬を膨らませて睨む姿に萌え・・おおつと、まだそんな次元にはいかないぞ。

「えと、じめん・・ね?」

「もう鈍いんだから、夏希が寝てる時とか僕が何回もちゅーしたり、夏希と一緒にお風呂入ってる時に何回も夏希の身体にちゅーしたのに。というか、夏希の胸元にある黒子って色っぽいよね」

「・・ジヨージ?」

「うん?だから、そうだつて」

「・・ジヨージ!-!」

なんてこいつた、一緒にお風呂に入つたことがあるのはこの世界でジヨージだけだ。しかも胸に黒子があるだと。がばつと学校指定の体操服の服の中を見る。

「やつやつ、左胸に2つある黒子」

「のねおおおおおおーー!」

自分でも気にかけたことなどなかつたが、本當だ。確かに黒子が見えた。

そんな、天使だと思っていた子はまさかの思春期でした。



思春期な君（後書き）

まさかの、むりつけ

とつあえず色とりどりの花が咲いている庭園に移動した。

兎さんが紅茶を淹れてくれて、夏希はクッキーを食べようとして左手を伸ばす。  
利き手である右腕は天使もとに思春期ジョージによつて、がつちり掴まれている。  
しかも真っ白な肌をして、二本の腕で、頭を夏希の肩に乗せながら。

「ジョージは食べないの？」

「夏希が食べさせて」

うるさいとした赤い瞳とふわっとした柔らかい金髪が夏希の頬を擦くすぐるところ、最強のコンボにノックアウトされる。

「ふみやー、か、かわ、かわいいー」

ぐりぐりと頭を押し付けてクッキーを小さな口元に持つていく。パクリと食いつくジョージの口は小さすぎてクッキーが全部入らなかつた。

「あひう、こんな弟が欲しかったよお」

夏希の弟は中学生、只今反抗期真っ盛りなのだ。

お姉ちゃんは、いつもやつて仲良く手を繋ぎながら一緒に飯食べたいんだが。

まあ、たまに見せるトコがいいんですが。

「う」飯だよー

「夏希、まだ食いつのかよ。部活帰りこいつぱって食つたの?」

「え、あれは別腹だつて」

「肉まんとアイスとフランクフルトとパンにピザが?」

「うふ

「夏希つてどんな男してんだ」

とこひびく。

え、ビヒーテレがあつたかって。

確かに口は悪く、夏希を姉だと思つていらない行動だが弟は呆れながらも夏希の頭に手を置いて一緒にリビングに行くのだ。その手の優しさは、間違いなく弟の照れ隠しだと自負している。

まあ厨二病よつました。

ハンドボールの友達の中学生の弟は厨二病らしい。まず「一ヒーはブラック」という虚栄に始まり、学校に行く時は眼帯と包帯を腕に巻いていく。

眼帯・・まあ、分からなくもないが、なぜ包帯と思つたが、それを聞いて納得というか啞然とした。

「皆、離れる。俺の腕が勝手に・・と腕を抑えながら呟ぶらしい。

うん、良かつた、普通の弟で。

まあ、反抗期でも厨二病じやなきやいいか。

そう思い出していくと袖をくいくいと引っ張つられた。

振り向くとアップのジョージの顔だ。

「ん? どうかした、ジョージ」

首を傾げると更にジョージの顔が近づき、睫が長いと思っていると柔らかいものが唇にふにっと触れた。

「え？」

「もひ、僕、弟じゃないって」

ふん、と顔を膨らませているがそんな顔に騙されない。

今、確実にジョージの可愛い唇が触れましたよ、触れました。

勘違いしていました。ジョージは思春期ではありませんでした。  
青春期でした。

近親・・おひとの先輩へお詫び

「油断も隙もねえ」

「くいつと腰をかつせらわれジョージと云ふ離された。

「俺の夏希なんだけど」

「いやこや、おかしいだろ」

「俺が連れてきたんだけど」

「連れてこられた、だけど」

腰に回された手をひねつて呆れ顔で見る。

快く連れて来られた訳ではない。無理矢理、だ。もしかしたら車に轢かれてしまつていかもしないのを助けたのに落とされて、こんなところに連れて来られるし。

「むしろ俺の婚約者でしょ」

「いやこや、突發的すぎだから」

夏希は手を振つてつざつとする。いい加減、自分の主張も聞いて欲しいものだ。

「てか何でそんなに冷静なの。キスされたんだよ」

「え？ 挨拶じやん」

「・・・」

唚然とするアベルと鬼さん。

夏希はその理由が分からずに大きな目をぱちくつとする。

だつて外国はキスするものだし、友達とくついたりするし一緒に物を食べたり、ペットボトルを回し飲みする。

だからキスとか、ぶつちやけ平気じゃね、といつ夏希の持論がある。むしろキスで騒いでいたら女優さんや俳優さんは大変だ。一回キスされる事に「私の純潔があ」と騒ぎ立てることになるのだ。というか今のキスはバードではないか。ちゅうとして離れていくなんて可愛いものだ。

だから平氣だ、むしろカモン。

夏希の許せる範囲は人より広かつたこともあり、またジョージを弟と捉えていることもあり嘆いたりしなかつた。

しかも、私は知っているのだ。成績優秀な夏希をなめるなよ。得意げなポーズを決めて、更に斜め45度という角度からアベルを見る。

「レザーフ」

ふふんとしてると鼻を摘まれた。  
う、う、可愛いお鼻が。

## 「何、その顔」

「はっはっは、アベル君よ。僕は全てお見通しさ」

腕を組んでエアーパイプを加えて口から空気を出す。

- はい？

「僕の優秀な頭にかかれば難解な問題も一発さ。君には婚約者がいるだろ?」

「は？」

「君は先程言った。名前を捧げることで結婚を意味すると。つまり君、アベルといつねがある君には婚約者がいるのだ。婚約者がいる身でありながらの愛の語らいは倫理に反すると思わんかね」「

「違います」

「そう、違つ・・ええーー!」

ずっと側で控えていた鬼さん。静かな声に夏希は叫んだ。

「なな、何でつ！？」

何故だ、完璧な推理だった筈だ。

「いえ、アベル様は王族ですから。王族の方は王直々に名を賜るのです」

「え、近親・・ふがつ」

「口塞ぐぞ」

ドスの利いた声に確実に天に召されるのを覚悟した。

ああ、写真でしか見たことがないお婆ちゃんが目に浮かぶ。  
今、行くね。

「いい、王族は先に名前を貰うの。婚約者云々の前に

「い、今聞きましたが」

「こ」の小さな脳に入らないと思つて繰り返してあげているんだよ」

「寛大な処置、有り難く存じます」

丁寧な口調の裏側に威圧を感じ、じれりと丁寧に答えてしまった。

はうう、怖かつたよお。

怖すぎて思わずアベルから逃げ出してジョージにすがりついた。自分より年下であるのに。お姉さん失格である。

「あうう、ジョージ」

よしよしと頭を撫でられながら落ち着いた。

とりあえず頭の中を整理する。

まず、この国は私がいた世界とは違う国、動物の王国である。そして国王のフランシスが統治していて、元は動物であったが人間に変われるらしい。それは大人になつた証であること。また名前がついている人は結婚している、ただし王族は別。

「これで如何でしょ」

「うん、夏希は偉いねえ」

「えへへ」

可愛い子に褒められる、なんて素晴らしい響きで「それがしうわ」か。

「それで夏希は僕と結婚するんだよね」

「…はい？」

「良かった、『はい』って言つてくれて」

いや、これは肯定ではなくて疑問の『はい』です。

「夏希は俺と結婚だよね」

いや、アベルと結婚するとか言つてないし。

「あら夏希様はモテモテですわね」

いや、動物にモテても。茶化さないで下さい、兎さん。あ、兎さんってことは、まだ結婚していないんだ。こんな綺麗なこと、男達は何をしてるんだか。うなれば、私が

「兎さん、結婚して下せこ」

「まあ」

「夏希、僕はビリになるの…？」

ジニアージがしがみついて秘技、上田遣いを行使している。

「あつ、じ、これが男が落ちる所か」

やばい、これは好きじゃない女の子がやつても男の胸はときめくよ。現に夏希の鼓動は早くなっている。いや、これは腰にしがみついているジニアージがぎゅぎゅうと締め付けるから別の意味でドキドキしてくるんだ。

「夏希が僕に結婚しようって言つたよね」

「ぐ、それは知らな・・」

「知らなかつたでは警察は通りませんわ」

いや、鬼さん。この国に警察なんているのですか。なんか子犬が帽子被つて嫌々ながらぬの丈に合わない服を着てこら姿が浮かぶ。

「夏希は僕のでしょ！」

だ、誰か、誰でもいいから何とかしてくれ。

夏希の思ひが届いたのだらつか、乾いた音が空を切った。

誰かが手を叩いたよつた。

それだけなのに兎さんとジヨーヌがすつと立ち上がって頭を垂れた。

「お前達、それくらじこしておけ」

「フ、フランス」

「・・フランシスだ」

救世主現る、果たして夏希はよつなるのか、次回を以て期待へだとい。

「IJの阿呆め」

「せつ、騒られてるよ。これを快感ひとべきか、いやまだ健全でいたい」

はい、腐った奴みたいな目で見られました。

まるで生ゴミに対するように夏希のジャージの襟を掴んで2人が  
らしく離した。

「アベル、これを連れて来たのは恩返しのためだろ？。ならば、さ  
つさと満足させるがいい。ジョージ、これはこの国のしきたりを知  
らない。なれば、そのように強制することはできない。だから、こ  
れに選ばせてあげよう。アベルがこれを連れ回す間は

「おいおい、何回私をこれ呼ばわりすれば気が済むんだ。私は物で  
はない、人間だ。人権のために私は戦つてやる。

「待て、フランシス。私は・・・」

「早くこの愚鈍を連れてけ」

「・・・っつー？」

「うじん、いや、愚鈍だと。な、なんて野郎だ。

夏希は高校生、しかも義務教育といいつゝ、ゆとり世代に生きていた  
夏希は初めて人に嘲りを受けたため顔が真っ赤になった。

何で、何で知りもしない赤の他人に言われなきやならないの。だつて今まで先生にも友達にもそんなこと言われたことがない。皆、夏希のこと好きだつて言つてくれて、ふざけあつて、笑つて。

「・・・ひ・・う・・え」

急に胸が苦しくなつて下を向いた。

じくじくと胸が鳴つて身体から突き破りそなほど痛い。視界もぼやけて床が見えなくなつた。

夏希が細かく震えていることに気付いたのか、フランシスは片眉を上げて下を向いている夏希に声をかける。

「おい」

「・・・」

それでも反応しない夏希の顔を無理矢理上げてみるとフランシスは目を見開いた。

「あ、その」

「う、う。違うもん、違うもん。」「心の汗が出て、きた、だけだ  
も、ん」

もう言ひ畢ひし、しゃくつ上げて泣き出した。

「あ、汗が。出できたんだもん、ふえ、ふみい」

「まだ言つか

フランシスは若干の罪悪感を感じ懐から金糸で縫われたハンカチを差し出した。

しかし夏希はそれを借りることなく、自分のジャージの袖で乱暴に拭くとフランシスを赤い目で睨んだ。

「何だよ、私だって早く帰りたいのに。それなのにあんたの弟が帰してくんないいじゃん。自分の弟を甘やかし過ぎなんだよ。過保護なママが。私だって母も弟もいるのに。眠り続ける私を心配してるので。それなのに帰してくんないいじゃん。動物が苦手って言いつてのに引き合わせて、こいつちばっか嫌な思いしてるので馬鹿にされて、もうふざけんな！――」

ずっと胸中にあった言葉が支離滅裂になりながらも口から出していく。本当はそんなふうに思つてなかつたのに夏希は顔を真っ赤にして叫んだ。

「フランシスの説教ママ――！」

最後に思いつきつづけたときびすを返して走つていった。

夏希の姿が見えなくなるまで4人はぽかんとして動くことが出来なかつた。



## 心の汗（後書き）

心配事が心の中にあると人は心をどこかにおいていたような気分になる  
まさしく私だ・・・  
あつ、あつ、どうしよう  
気になることがあって書けないとい

まるで短距離走並みに全速力で走った。どこも似たような壁しかなかつたが夏希は我武者羅に走り続けて何とか城門を見ることができた。

顔を真っ赤にしながらも瞳と鼻から涙を流して脇田も振らずに走る城門を守っている『ココラさん』は驚いていたが夏希を止めようと声をかける。

「あ、あの」

実は口下手だが必死の形相で声をかけるが夏希はそんな『ココラさん』に目もくれずに慌てふためく門番兵たちの横を走り抜け、城下へと向かつた。

どれくらい走つただろつか、夏希は暫く走つていなかつたために筋肉が落ちた足が痙攣するのを感じてやつと止まつた。

荒い呼吸を整えながら、その場で仰向けになる。そして強張つた足をさすりながら辺りを見回すと目前に大きな湖がある。それを囲むように木々が生い茂り静けさが広がる。

どうやら街から離れた場所に来てしまつたらしい。道も分からず、途方に暮れる。ここはどこだろ、早く帰らなくては。そう思うも自分が幼児のように駄々をこねて叫んだことを思い出して戻るのが憚られた。

「・・戻る？」

自分が考えたことに気付いて腕を抱く。

「何で、あそこは私の家じゃないのに」

『戻る』なんて可笑しい。あの城は夏希の家ではないのに、他人の住む場所なのに。どうして『戻る』なんて言葉が出てきたんだろう。訳も分からず笑いが込み上げてきた。

目尻から幾つも涙が落ちることを氣にも止めず腹を捩つて乾いた笑い声を出した。

だがそれも長く続かず、すぐに噎せて前髪をかきあげた。

瞼が痛むのを感じて湖に顔を映す。綺麗な湖は澄んでいて水面下も見ることができた。

「酷い顔だあ」

腫れぼつたい日は真っ赤に充血していて小さな鼻も赤い。そんな目を擦つて、自分の頬を摘んで一気に顔を水面に突っ込んだ。息の続く限り入れて苦しくなつて顔を出す。何度も同じことを繰り返して、そしてジャージの袖で乱暴に拭く。

冷たい水が顔を冷やして大分ましになつたようだ。

次いでに未だ筋肉が強張つている足を水につけた。ジャージをまくりあげ、水に入れながら揉む。本当は足を温めた方がいいのだろうけれど冷たい水は気分も落ち着かせる。

「気持ちいい」

ほつと溜め息をついて、日を閉じながら頬を撫でる風により、かさかさと揺れる木の葉の音を感じながら一定の間隔で揺れる水面が夏希の足を揺らすのを楽しんでいた。

近くの岩に身体を押しつけ、暫くそのままでいるときゅーきゅー

と声が聞こえる。

「・・・ジョージ？」

この長閑な雰囲気にはまだ身を預けていたくて、開けてたくない目を嫌々ながら開けるとそこにいたのは黒い目を輝かせている賢そうな顔をしたイルカがいた。

湖（後書き）

ちょっとシコアスでしたかね？  
基本「メティー」にしたいので、それをお笑い要素を入れていきます

## 美人に化粧はいりません

夏希は足をつつくのが動物と分かった途端、悲鳴をあげる。

「ふつぎやああああああああ…」

まるで蛙のよつた素早さで水から足を出して飛び上がり後ろへ下がる。

イルカも驚いたように一瞬で湖の中に戻つて身体を震わせていたが夏希が慄いて放心していると労るよつにまた水面から顔を出して夏希を心配そうに見守つてくる。

夏希はビクビクしながらもイルカと向き合つ。まあ、3メートル以上離れていたが。

「なあ、ぬ、へ、へ、見てるよ、見てる。あう、ギザギザの歯で私を食べるんだ」

虚ろな瞳でブツブツと言つ。

しかしイルカは食べるだなんて心外だと呟つよつと鳴く。

「はわわ、怒られた。男の子に怒られるなんて・・あ、」この間、ふりだ

そういえば、クラスメートの男子が楽しみに待っていたデザートのプリンを食べてマジ切れされたな。いやはや食べ物の怨みは怖いと身もつて味わった日だった。

うんうんと頷いている夏希を先程まで騒いでいたイルカが静かに見つめているのに夏希は気がつかなかつた。

ふと夏希はジョージといつ頭を克服できたのだからもしかしたら  
イルカもできると思い一歩一歩擦り足で近寄る。  
「さあ、はい」と頷げる。

「でもイルカって海の生き物だよね？なんか生臭そうなイメージしない」

生臭い、と言つた瞬間、イルカが奇声をあげて勢いよく湖から飛び出して夏希に体当たりした。

「キシャアアアア」

あ、臭くない。

頭の片隅で思いながら意識がなくなるのを感じた。

頬がじんと痛む感じがして覚醒した。

「あら、起きた？」

「・・ほっぺが痛い」

どうやら夏希は湖際にイルカに激突され意識を失っていたようだ  
った。お腹部部分が濡れているため突撃された荒々しさを物語つてい  
た。

「起きなかつたから呪いちゃつた」

お茶目な声に振り向くと美女がいた。切れ長の石榴色の瞳に通つ  
た鼻筋は先がつんと上を向いている。卵系のラインに腰まである力

ールしてこる灰色の髪。すらりとした長身の体型は物凄く羨ましい。

だが、惜しい。いや、勿体無い。色白の肌は化粧がいらない程きめ細やかなのに肌より白い顔があつてチークは凄く濃くて目の上はパンダみたいに黒い。口にはベージュの紅をひいて顔に合つていないメイクがしてあつた。

夏希は頬が痛むのも忘れてガン見してしまつた。

「・・・わーお、勿体無い」

「なんですか？」

美人に睨まれた夏希は身体を小さくして土下座した。

「すみません。生まれてきてごめんなさい」

美人の怒った顔に心を打ち碎かれ半べそをかきながら平社員の気持ちが分かつた気がした。

「そんなに怒つてないわよ、あんた失礼だけど」

「ふみい、返す言葉もございません」

謝りながら大きな胸を見る。ゆつたりな服を着ているといつに2つの存在感あるものが誇張している。

「でかあ」

「あんた、思ったこと全部口から出てるわよ」

「あわわ」

「、こんな美女とぜひ親しい仲になりたい。  
夏希は同性にドキドキしながらじみ上げてくる唾を飲み込み、手の平をジャージで拭いて手を出す。

「あ、あの」

「な、何よ」

夏希の陥落に押されながら後ずさりしているが夏希はその距離を埋めようと更に詰め寄る。

「せひ、あなたのお顔に化粧をさせて下せこ」

「はあ？」

## 止まるのだと、我が涙

夏希は女性の化粧品を借りて顔をいじりながらも、田本と同じような化粧品が多くたため使い方を聞きながら取り組んだ。

「ひとつとした化粧を落として、まずは化粧水をつける。

夏希は田の前の長身過ぎる女性に岩を背にして座つてもう、夏希その膝に跨ぎながら座り顔を掴みながら向き合つていた。

「まずは染みこませるよつてに馴染ませます。本当に顔を冷やして毛穴を締めてからがいいんですけど」

まあ、こんなに近くで顔を見ても毛穴が見つからないのだから必要ないだろ？

次に保湿クリームを塗る。きめ細やかな肌には別にいらぬいかもしけんが、まあやつておこう。

全体に練り込ませて顔も引き上げる。まだ弛んでいないが将来のためだ。

すると猫みたいにゴロゴロと喉を鳴らす。田もいつとつしていって夢心地な気分のようだった。

「気持ちいいわね」

「本当ですか？」

しっかりと下地をしてから、つづらと肌より少し濃い色のファンデーションを塗つて色がない頬に薄いピンク色のチークをする。瞼は長いため何もしないが目の周りにラメをつけたりラインを引く。本当は化粧なんていらない程に美人だが本人がしたいと言つたために素材を活かして全体的に薄く施した。

「少し口を開いて」

紅は真っ赤にして悪女アピールだ。真っ赤なんて似合わない人が多いがやはり美女は似合っている。こんな目で薙まれたらゾクゾクしちゃう。

筆で形作り、うつすらと開いた口に色をつける。

情欲的だ、男なら人目をはばからずに襲つていたところだな。

「できました、別嬪さん」

「ありがとう。でも別嬪じゃなくてフイナよ」

「ありや、お前があるってことはもう野郎の物なんですかい！？」

そんな、そんな。私がせつかく綺麗にしたつて言つのに別の男の唾がついているなんて。

目の前で絶望ポーズをとつている夏希を綺麗に無視してフイナは夏希の腰を寄せてそりこ密着させ、おでこをくつつけた。

「で、何で泣いてたの？」

「え？」

「あんた、自分が泣いてたのも忘れてんの？」

「あー」

「・・あんたつて」

いや、忘れてたわけじゃないよ。うん、ただ悲しみを忘れるほど  
の美女に出会ってしまっただけであつて。

「で？」

「いえ、フイナさんのお耳を汚すことはばかられまして」

「いいから早くいいなさい」

フイナの睨みに一秒も経たずに夏希は屈服した。

「あう・・実はですね。その、赤の他人に知らない国に連れてこら  
れて、しかも嫌がらせとしか思えない恩返しをされまして。最後には罵られ、もう今まで溜まっていた鬱積が出てきてしまった、ので  
す」

身ぶり手ぶりを使って表そうとするもの、フイナが近くであまり  
身動きが取れない。

「で、でもですね。皆さん優しくしてくれて本当に、あの嬉しいん

ですよ。ただ、暴言を吐いてしまつたためどう戻ればいいか、分からなくて」

「ふーん」

真剣に悩んでいる夏希の前で、どうでもよさげな声を聞くと先程止まつたはずの涙腺は緩む。

「う、うう、な」

向き合つてゐるため泣いてゐるのが分かつてしまつ。なので夏希は顔を伏せてフイナの胸元に顔をつけて肩を震わせる。

「あんた、泣いてんの？」

「先程、猛スピードで、虫が、田にぶつかつ、た」

「・・・はいはい。あんたも辛いわね。知つてゐる人が誰もいない場所に連れてこられて大変だつたでしょう」

優しく夏希の短髪を梳いてくれる動作に胸が温まり、次から次へと涙が出る。

「優しく、しな、い、でえ」

本当は優しくしてもらつと嬉しい。優しい言葉に仕草。

でも今はやめて欲しかった。

止まるのだ、我が涙（後書き）

あづこ - - -  
とかるひみつ

お姫様ではないのです（前書き）

久しぶりですな^ ^

お姫様ではないのです

ひとしきり泣いた後、フィナにまるで子供をあやすかのようによしよしと頭を撫でられていると落ち着いて真っ赤に腫れた目でフィナを見上げるとフィナの煌びやかな服が夏希の涙で大きな染みを作っていた。

ああ、涙で世界地図ができた。じゃなくて、ああ、服が。服があ。

「服が・・」

「胸が気持ち悪いわ」

「あうあう」

「別に気にしないって」

今にも爆発しそうな胸には似つかわしくない染み。服の色をより一層濃くしてしまっている。申し訳ない気持ちでいっぱいだがフィナの寛大過ぎる心の広さにときめいた。

男だつたら君の心にメロメロだ。

「じゃ、行きましょうか」

感慨にふけているとフイナがぼそりと呟くが、どこに行くのか見当もつかずに頭を傾げる。フイナも夏希の動きに合わせて首を傾げるが夏希の子供っぽさとは違い、どこか妖艶な雰囲気を醸し出していた。

「どこに？」

「王宮に決まってるじゃない」

「・・・はい？」

夏希の思考回路は凍結した。

フイナの言っている意味が分からぬ。王宮に行くつて王宮！？

王宮つてフランスがいるところだよね。先程夏希が逃げてきた。

「い、や、だ」

「あなたに否定権なんてないわよ」

「人権を侵すことはどうできない」

「大丈夫。私、動物だもの」

「ぐつ」

「そうだよ、ここは動物王国じゃないか。いつも皆が人間の姿にな

つてたから忘れてたよ。

だが、はたと思う。フィナは何の動物なのか。全く分からない。聞くべきか、いや蛇とか言われたらもう抱きつけない。

うん、知らぬが仏だ。

一瞬の逡巡のあと笑顔をつくりて自分の問いに蓋をした。知りたいといつ生命を齎かす問題に田を隠り、平穏な日々を過ごうではないか。

「せつやと行くわよ。私も用事あつたし、丁度いいわ」

「それは嫌あ」

逃げ回ろうとフィナの膝から立ち上がりうとしたが、それよりも早く腰をもどされる。それでも夏希は逃げようと腰に回された手をどかそうと踏ん張るがびくともしない。

そんな馬鹿な、夏希は毎日腹筋背筋、腕力、持久力をつけているのに。田の前の労働などしらぬどこの令嬢のようなフィナに負けるとは思っていなかつた。

第一、腕の細さが一緒にうして、この手は動かないのだ。違うのは夏希の田に焼けた腕とは違い、とても白いだけだ。

「馬鹿ね、強いのよ」

愕然とする夏希に対しフィナは悠然と微笑みかける。当たり前でしょ、とすら言葉が聞こえてきた。

「ぬぬぬ」

どうあがいても鎮のようにびくともしないフィナの腕に夏希は白

旗を上げるしかなかつた。

無駄な足掻きを止めた夏希の膝の裏に手を回して、もつと方で夏希の背中を支える。どこにそんな力があるんだと、聞きたいが天下の問題はそれではない。つまり、今の体勢だ。

「ハ、これは所謂おおおおおお、お姫様でででは

「やうともやうな、あんた別に姫じやないんだからお姫様じやないでしょ」

「・・・ふむ、では夏希抱っこかな

「・・・やうね」

なんだか上から深い溜息が聞こえた気もするが、そこは年培つてきたスルースキル、聞きたくないものは聞き流せ、だ。

こうして夏希は夏希抱っこでファイナに抱えられ王宮へと連れていかれた。



中年オヤジ（前書き）

まあ不健全なモノが入っていますよ  
うん、心が清らかなあなたは見ない方がいいのだ

フイナは夏希が走ってきた距離をことも容易く夏希を抱き上げながら歩いて、着々と城に近づいてくる。

「まだ心の準備があ

「身体の準備ができてれば大丈夫」

いや、そういう問題では。  
突っ込もうとするが、それより先に夏樹がどんなに望んでも届かない大きな胸に目がいった。

じーっと見つめているとその熱い視線に気づいたのか、フイナが苦笑する。

「触つてみる?」

「いえいえ、そんな。女性の胸を触るなんて、なんて破廉恥な。男の風上にも置けぬ奴ですよ」

「あんた、女でしょ」

胸周りが怪しいけど。そもそもと言われたがスルーだ。わざわざ自分が傷つく道は選ばん。

「ええのですか！！」

「別に減るものじゃないしね」

「くつへつへ。本当にいいんですかい」

「中年親父みたいで嫌」

確かに胸だけに注目している夏希は親父だ。しかも権力を盾に嫌がる部下に対し「いいじゃないか、君と僕との仲じゃないか」なんて言いそうな上司のオッサンだ。薄らハゲの。

そんな容貌を浮かべてしまつた自分に嘆く。この、ど変態め。

あう、たかが胸じゃないか。何だい、何だい。夏希だって大人になれば大きくなるわい。

だが羨望の眼差しで見てしまつ夏希はやつぱり親父で。

両手でフィナの胸に触つた。

「・・・ん？」

だがあるべき触感がない。なんか少し固いのだ。

「あは、バレた?」これ、造りもの」

なんと美女さんも胸に困つてはお互に大変ですね。

「今度バストアップの方法、教えてあげますね」

「うう、そつと耳つかするとフイナは悪戯を思いついたかのよつ」、  
にやりと笑つた。

「そんなことしなくても、あるわよ、方法。しかも簡単に

「何ですよー是非」教授お願いしたい

やつぱり今からでも努力は必要だよね、うん。努力の積み重ねが  
功を生むのだから。いや、別に毎日やつてている訳じやないよ。巨乳  
なんて羨ましくないんだからな。

「いいわよ、毎日してあげる」

「へ・・・へおわつー」

意味が分からず首を傾げるとフイナがいきなり膝裏に入れてい  
た腕を外した。とつたのことでバランスを崩してフイナの首に両手  
で掴まる。

フイナは左手だけで夏希を抱えている。こんな細腕に凄い力が、  
感嘆するよりも早く自分が落ちる姿を想像する。

「こきなり何を、つて、ふにゃ、あ

身体を片手だけで支える不安定さに大丈夫か尋ねようとしたがで  
きなかつた。夏希の胸の上にある手のせいで。いや、その手はある  
だけでなく動いている。つまり夏希の胸を揉んでいるのだ。

「ふあ、こやにゅにを。あ、や。駄目だ、つて、あ、あん」

艶めかしく動く少し女性にしては筋張った手が夏希の左右の胸を

駆け巡る。

「あー、あんた。結構胸あるじゃないの」

そう言いながら手の動きを止めない。

「ふおつーー？」

顔が赤くなるのを抑えながらフイナの手をなんとか止められる。

「せ、はあ。じ、自分でやります」

「自分で揉むのー！」いつのまに男性化

「バストアップの体操をしますので充分ですーー！」

夏希はぐつたりとフイナの肩に顔を乗せる。

「残念」と呟きが耳のすぐ側で聞こえたと思つたらフイナが片目を瞑りながらさらに続ける。

「もし揉んで欲しかつたらこつでも言つて頂戴ね。やつてあげるわ

」「

「結構ですー！」

夏希の悲鳴が上がった。



## 胸が潰れますから

先程の胸揉まれ事件から夏希はフィナから腕の中から少しでも距離をとろうとしたがフィナは決して離さなかつたために夏希は早々に諦めて、城に着いたらどうしようかと頭を抱える。

(いや、別にそこまで怒つてたわけじゃないんだけどね。ただ、うーん、何と言つか。皆が仲良しだから焼き餅とか？　あ、焼き餅食べたい)

ふくーっと膨らむお餅を想像してぐーとお腹が鳴る。一人悶々と考えるがすぐに違うところに脱線してしまつ。

「なに百面相してるのよ?」

唸つているとフィナがコシンと額を叩わせる。

「ちょ、前見て!」

額を叩わせながらも歩くフィナに危機感を感じる。といつか自分が落とされるのではと心配する。

「はいはい、あんたは子供なんだから難しく考えなくていいのよ

その言葉はすとんと入った。

夏希は子供だからな、難しく考えるな。自分が思つた通りに進めばいい。

それは、もう聞くことのできない言葉。どんなに会いたいと思つても、どんなにその腕に抱かれたいと思つても叶うことができないもの。

単純だけれどもその言葉は夏希にとっては何よりも大事で大切な言葉だった。

「あう・・・

「何よ、あたし何か変なこと言つた?」

今すぐ泣きそうな夏希の顔を見てフイナはぎょっとする。きつく言いすぎただろうか、少し不安になつたフイナだったが夏希はふるふると首を横に振つて瞳にたまつた涙をこらえる。

「違うのですよ。少し昔を思い出しただけなのです」

「昔?」

「はい、昔フイナさんと同じようなことを言つてくれた人がいたんですよ」

「・・・」

フイナが夏希の顔を至近距離で見ると夏希は柔らかい微笑を浮かべていた。

「やう、ならいいけど」

まだ納得のいかない」とばかりだつたが夏希の顔を見て言葉を押し込む。

「私は、フイナさんが大好きですよ」

「ありがとうね」

夏希はフィナの首に齧りついてしかと離さない。

何かが夏希の琴線に触れたのだろう。それは夏希にしか分からないがフィナに対して親しみを感じる行為だ。最初に出会った時はやはり緊張をしていたようだが、今はまるで母の胸に齧りつく子供のようだった。

「あら、もう少しでうちに着いたわよ」

「 フイナに抱えられながら首を正面にまわすと大きな城が見えてくる。」

「スル…」

しまつた、結局何の案も浮かばずに来てしまつたよ。まあいと頭を抱え出すがフイナの足は止まらない。そして夏希の腕を掴む力も何故か強まつた。きっと夏希が逃亡すると睨んでいるのだろう。

「ふせめ、なひま壁み廻つせんべり」

夏希がじたばたと暴れ出そうとしたがフイナが先手を打つてそれを止める。

「また揉むわよ」

「こやあああああーーー。」

揉むわよと黙つておきながら、もつ揉んでいい。夏希は泣きながら逃亡をしないとフイナに宣誓をして、やつとのことで離してもらつたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0806s/>

---

動物の王国

2011年9月15日01時03分発行